青森県埋蔵文化財調査報告書　第457集

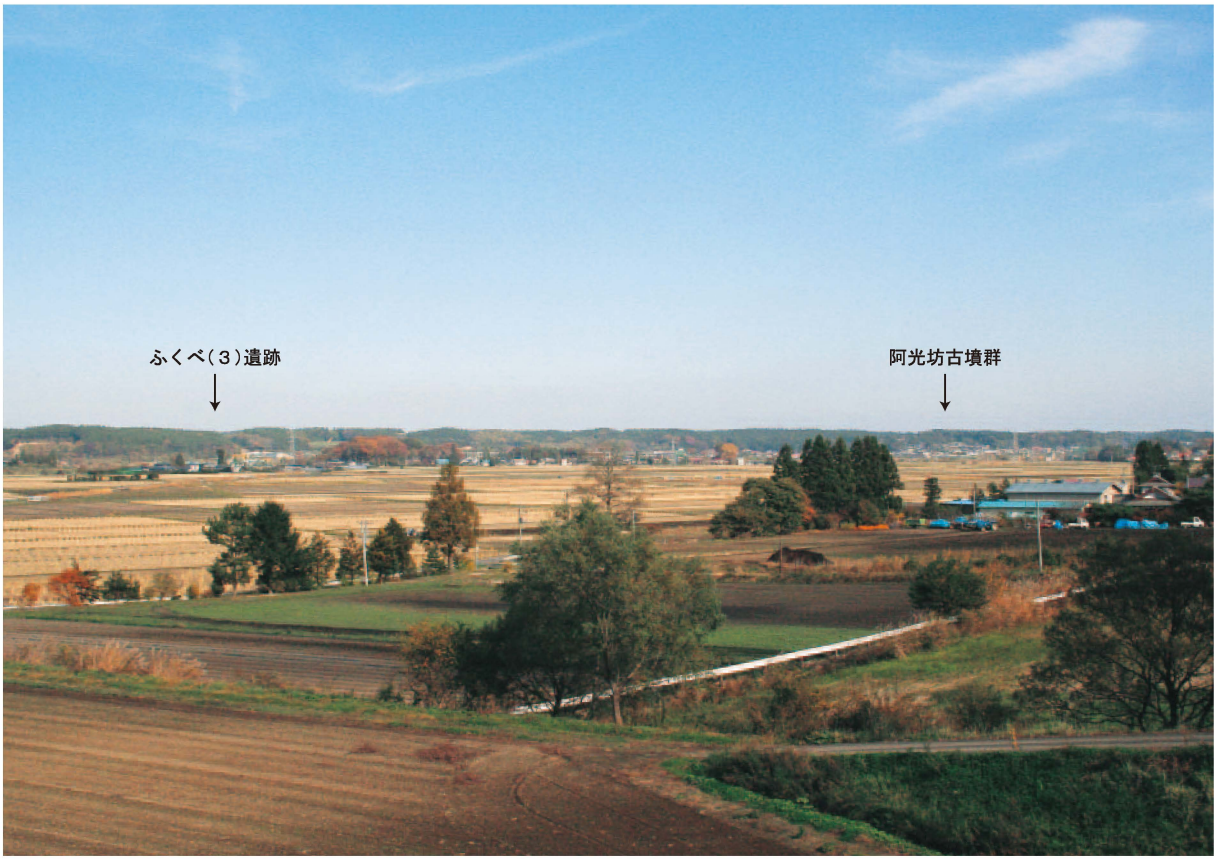
# ふくべ（３）遺跡Ⅱ
# ふくべ（４）遺跡Ⅱ

―東北新幹線建設事業に伴う遺跡発掘調査報告―

２００８年３月

青森県教育委員会

ふくべ遺跡群（六戸町上吉田から）




ふくべ（３）遺跡・阿光坊古墳群（六戸町下吉田から）

**遺跡遠景**

画像合成あり

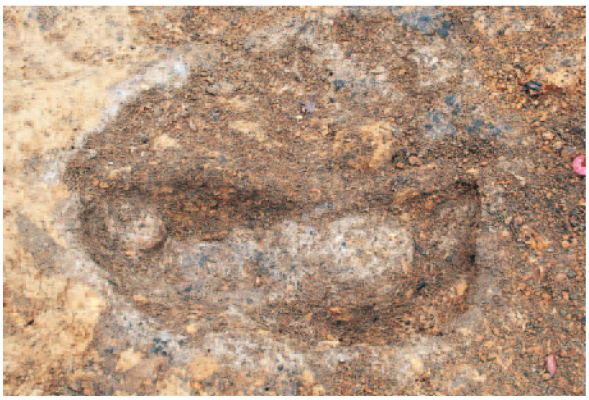
ふくべ（３）遺跡2003・2006年度調査区、ふくべ（４）遺跡2003年度調査区

煙道天井部に白色系粘土を用いたカマド①（第37号住居跡）

煙道天井部に白色系粘土を用いたカマド②（第38号住居跡）

半地下式の煙道部を備えたカマド（第47号住居跡）

煙道の無いカマド（第39号住居跡）



白色系粘土が貼られた土坑（第38号住居跡２号土坑）

方形の主柱穴（第38号住居跡）

ふくべ（３）遺跡①

カマド付近に集中する土器（第42号住居跡）

同上A地点出土出羽型長胴甕

同上B地点出土出羽型長胴甕

カマド右脇出土の出羽型長胴甕（第44号住居跡）

床面出土の出羽型長胴甕（第44号住居跡南端）

ふくべ（３）遺跡②

支脚として重ねられていた土器（第43号住居跡）

土師器甕と須恵器皿（第43号住居跡）

墨書のある坏と高台坏（第45号住居跡）

小型の住居（第46号住居跡）

第８号掘立柱建物跡

ふくべ（３）遺跡③

第１号円形周溝

第１号畝状遺構確認状況

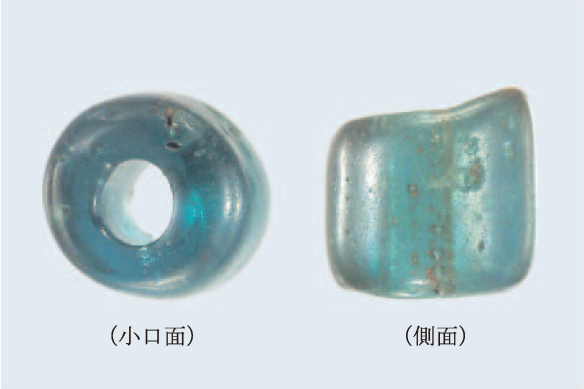
ふくべ（３）遺跡④

第42号住居跡出土土器

ふくべ（３）遺跡出土高台坏・出羽型長胴甕

ふくべ（３）遺跡⑤

坏（第34号住居跡）




ガラス製管切り玉（第34号住居跡）

被熱礫（第33号住居跡）

黒雲母の入った土器（第37号住居跡）

口縁部に波状の装飾がある甕（第34号住居跡）

異形の土製品または土器（第45号住居跡）

ふくべ（３）遺跡⑥

高台坏（第42号住居跡）

いわゆる転用硯の須恵器皿（第43号住居跡）

墨書土器（第45号住居跡）

ススが付着した坏（第42号住居跡）

出羽型長胴甕（第42号住居跡）

支脚として重ねられていた土器（第43号住居跡）

ふくべ（３）遺跡⑦

第１号道路状遺構・第４号住居跡

第１号道路状遺構の土層断面（G−G′）

第１号円形周溝

第１号炭窯跡

ふくべ（４）遺跡

# 序

青森県上北地方の奥入瀬川下流域には、青森県内でも特に奈良・平安時代の遺跡が数多く残されています。この地域における東北新幹線盛岡以北建設計画を受けて、青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成14・15・18年度においらせ町（旧下田町）ふくべ（３）・（４）遺跡の発掘調査を実施しました。

今回報告する平成18年度の調査では、飛鳥・平安時代の竪穴住居跡・道路跡・円形周溝などが確認されたほか、多くの土器とともにガラス玉や炭化したアワやイネなどが出土しました。更に遺跡周辺からは、この時代の埋まり切っていない竪穴住居跡も多数発見されました。

これらの調査成果は、奥入瀬川下流域に定着し、史跡阿光坊古墳群のような大規模な終末期古墳群を残した人々の生活を知るための貴重な手掛かりとなります。当時の記録が文献史料にあまり登場しないことを考えれば、その資料的価値の重要性は言うまでもありません。

本報告書は、ふくべ（３）・（４）の調査成果をまとめたものですが、埋蔵文化財の調査・研究のみならず、青森県の歴史研究あるいは学校教育や社会教育に広く活用していただければ幸いに存じます。

最後ではありますが、発掘調査の実施から報告書の作成まで御指導御協力を賜りました関係各位に対し、厚く感謝申し上げます。

平成20年３月

青森県埋蔵文化財調査センター
所　長　末　永　五　郎

# 例言・凡例

1　本書は、東北新幹線建設事業に伴い、平成18年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した上北郡おいらせ町ふくべ（3）・（4）遺跡の発掘調査報告書である。

2　ふくべ（3）遺跡の所在地は、青森県上北郡おいらせ町字瓢245－26ほか、青森県遺跡番号は48009である。また、ふくべ（4）遺跡の所在地は、青森県上北郡おいらせ町字瓢243-77ほか、青森県遺跡番号は48014である。

3　本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。

4　発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部東北新幹線建設局が負担した。執筆は、確認調査分を青森県教育庁文化財保護課能代谷文化財保護総括主査、その他を青森県埋蔵文化財調査センター佐藤文化財保護主査が担当した。

5　下記にある分析・鑑定・原稿執筆は、下記に委託した（順不同、敬称略）

| | |
|---|---|
| 樹種同定 | 株式会社　古環境研究所 |
| 種実同定 | 株式会社　古環境研究所 |
| 畝状遺構採取土壌分析 | 株式会社　古環境研究所 |
| ガラス玉成分分析 | 株式会社　古環境研究所 |
| 炭窯出土資料の分析 | 株式会社　古環境研究所 |
| 土師器胎土・粘土分析 | 東海大学　松本　建速 |
| 須恵器胎土分析 | 大阪大谷大学　三辻　利一 |
| 石質鑑定 | 青森県立八戸中央高等学校　佐々木　辰雄 |

6　出土遺物の実測図作成について、一部を国際航業株式会社に委託した。

7　遺物写真撮影は、シルバーフォト、スタジオ・エイトに委託した。

8　掲載した地図は、国土地理院発行の1：25,000 地形図「犬落瀬」・「百石」、1：2,500地形図おいらせ町都市計画図を複製・使用した。

9　付図に掲載した航空写真は、株式会社シン技術コンサルの提供を受けた。

10　遺構・遺物の本文・図中における表現は、原則、次の様式・基準によった。

・座標値は、日本測地系（Tokyo Datum）に基づく平面直角座標系第X系に準じており、挿図中の北方位は座標北を示す。複数の遺構の図示にあたっては各々方向を示した。

・遺構平面図の脇にあるマイナス値は、床面からの深さを示す。

・堆積土の観察・注記は「新版標準土色帖」（小山・竹原：2002）を用いた。

・挿図の縮尺は各図にスケールを付したが、遺物写真は縮尺不同である。

・遺構・遺物の計測値等は観察表に掲載している。

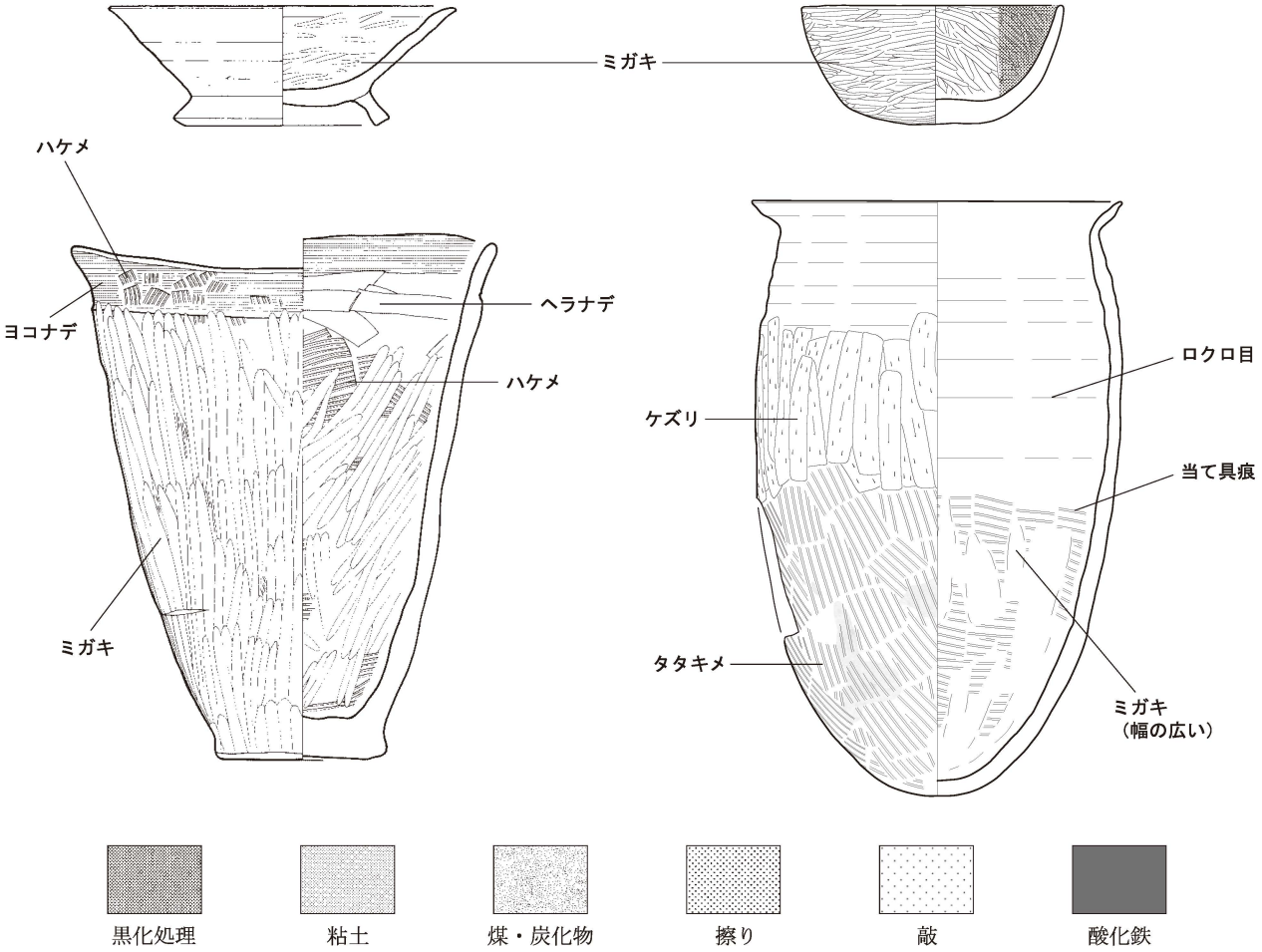
・遺物には観察表・計測値を付した。（　）内の数字は、口径・底径は推定値、器高は残存値、残存率は残存部位における残存値を示す。

・図中で用いた記号・網掛け等は、以下のとおりである。

［遺構凡例］

●：土器　△：石器　■：土製品　▲：鉄製品

［遺物凡例］




11　引用・参考文献については、原則として巻末にまとめている。

12　発掘調査及び報告書作成における出土品・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

13　発掘調査及び本報告書作成にあたって、下記の諸氏から御協力・御助言を得た。
（敬称略・五十音順）。
宇部則保、工藤司、小谷地肇、澤頭要、種市繁定、種市進、袴田義男、福井流星

# 目　次

序
例言・凡例
目　次

ふくべ（3）遺跡隣接地、ふくべ（4）遺跡、洗平（2）遺跡近接地確認調査
第１章　調査の概要 …… 3
第１節　調査に至る経緯 …… 3
第２節　調査要項 …… 3
第３節　調査方法 …… 4
第４節　調査結果 …… 4

ふくべ（3）遺跡
第１章　調査の概要 …… 15
第１節　調査に至る経過 …… 15
第２節　調査要項 …… 15
第３節　調査方法 …… 16
第４節　調査経過 …… 19
第２章　遺跡の環境 …… 20
第１節　遺跡の位置 …… 20
第２節　地形・地質 …… 20
第３章　遺構・遺物 …… 21
第１節　縄文時代 …… 21
第２節　古　代 …… 21
第３節　古代以後および時期不明 …… 93
遺構計測表・遺物観察表 …… 107

ふくべ（4）遺跡
第１章　調査の概要 …… 121
第１節　調査に至る経緯 …… 121
第２節　調査要項 …… 121
第３節　調査方法 …… 122
第４節　調査経過 …… 122
第２章　遺跡の環境 …… 124
第１節　遺跡の位置 …… 124
第２節　地形・地質 …… 124

第３章　遺構・遺物……126
第１節　縄文時代……126
第２節　弥生時代……126
第３節　古　代……128
第４節　古代以後および時期不明……141
遺構計測表・遺物観察表……153

理化学的分析
第１章　畝状遺構採取土壌に関する理化学的分析……159
第２章　炭窯跡出土資料の理化学的分析……171
第３章　ふくべ（３）・（４）遺跡の樹種同定……181
第４章　ふくべ（３）・（４）遺跡出土の種実同定……187
第５章　ふくべ（３）・（４）遺跡出土土器・土壌の化学分析……198
第６章　ふくべ（３）・（４）遺跡出土須恵器の胎土分析……205
第７章　ふくべ（３）遺跡出土ガラス玉成分分析……209

分析と考察……213

引用・参考文献……266

写真図版

報告書抄録

奥　付

# ふくべ（３）遺跡隣接地確認調査
# ふくべ（４）遺跡確認調査
# 洗平（２）遺跡近接地確認調査

# 第１章　調査の概要

## 第１節　調査に至る経緯

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部東北新幹線建設局の東北新幹線建設事業計画に伴って、平成15、16年度に青森県教育委員会が事業予定地の現地調査を行った結果、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地であるふくべ（４）遺跡内に所在すること、更にはふくべ（３）遺跡の隣接地並びに洗平（２）遺跡の近接地で地形的に埋蔵文化財が包蔵されている可能性が極めて高い事業予定地も存在することが判明した。このため、その取扱いについて、関係機関と協議した結果、買収用地の他に保護盛土施工地内は民有地を借地する予定との事から、その手続き等が完了する平成16年度以降に青森県教育委員会が確認調査を実施することとしたものである。なお、平成16年度にすべての手続き等が完了したことで、平成17年度に確認調査を実施した。

## 第２節　調査要項

１．調　査　目　的　　東北新幹線建設事業に先立ち、当該地区に所在する下田町ふくべ（４）遺跡（現：おいらせ町ふくべ（４）遺跡）、同町ふくべ（３）遺跡隣接地、洗平（２）遺跡近接地の確認調査を行い、埋蔵文化財の有無等を確認する。

２．調　査　期　間　　平成17年９月16日から同年９月30日まで（洗平（２）遺跡近接地）
平成17年11月８日から同年12月２日まで（ふくべ（４）遺跡、ふくべ（３）遺跡隣接地）

３．遺跡名及び所在地　　ふくべ（４）遺跡（青森県遺跡番号４８０１４）、ふくべ（３）遺跡（青森県遺跡番号４８００９）　下田町字瓢・字神明前地内
洗平（２）遺跡（青森県遺跡番号４８０１３）　下田町字洗平・字瓢地内

４．調　査　面　積　　５８９㎡

５．調 査 委 託 者　　独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部東北新幹線建設局

６．調 査 受 託 者　　青森県教育委員会

７．調査担当機関　　青森県教育庁文化財保護課

８．調査協力機関　　下田町教育委員会（現：おいらせ町教育委員会）、上北教育事務所

９　調　査　体　制　　調査協力員　下田町教育委員会教育長
調査担当者　青森県教育庁文化財保護課
埋蔵文化財グループリーダー　相馬　信吉（現：青森県立郷土館学芸主幹）
文化財保護総括主査　能代谷征則（現：青森県立田名部高等学校主査）
文化財保護主査　神　康夫（現：当センター文化財保護主査）
文化財保護主査　鈴木　和子
文化財保護主事　小山　浩平（現：当センター文化財保護主査）
文化財保護主事　石沢　聡

## 第３節　調査方法

確認調査は、調査対象区内に任意にトレンチを設定して行った。

トレンチの規模は、基本的には４ｍ×４ｍ方形としているが、調査区の現況に合わせて変更している。

洗平（２）遺跡近接地は、調査対象範囲を各々Ａ区、Ｂ区と呼称し、あわせて32箇所のトレンチを設定し、一部は重機で表土剥ぎを行った後に人力による分層発掘を行った。ふくべ（４）遺跡は、調査対象範囲を各々Ａ区、Ｂ区と呼称し、あわせて39箇所のトレンチを設定し、人力による分層発掘を行った。ふくべ（３）遺跡隣接地は、２箇所のトレンチを設定し、人力と一部重機を併用しながら、分層発掘を行って遺構・遺物の確認に努めた。

基本土層は、洗平（２）遺跡近接地においては２トレンチで確認し、ふくべ（４）遺跡においては４トレンチで確認し、ふくべ（３）遺跡隣接地においては40トレンチで確認している。

土層の色調等の観察は、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄：１９９５）を使用した。

写真撮影については、基本的には35ミリのモノクローム、カラーリバーサルの２種類のフィルムを使用し、必要に応じ、ネガカラーを併用した。

## 第４節　調査結果

洗平（２）遺跡近接地並びにふくべ（３）遺跡隣接地では、すべてのトレンチで遺構・遺物が確認されなかった。

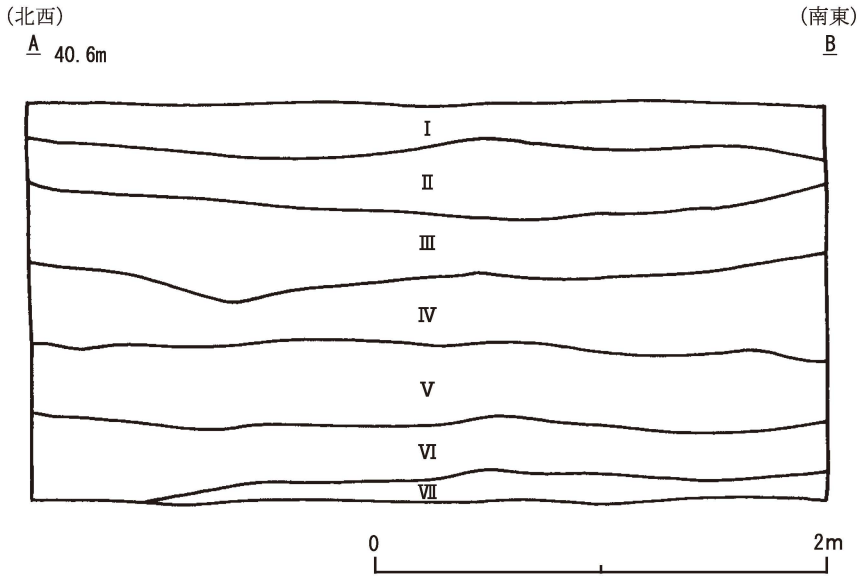
ふくべ（４）遺跡においては、Ａ区の10トレンチで堀跡を１条検出し、11トレンチでは柱穴と考えられるピットを２基検出、19トレンチでは柱穴と考えられるピットを１基と竪穴住居跡の床面と考えられる硬化面を検出した。また、遺物の出土もあり、６トレンチでは縄文土器片１片、11～14トレンチ、17～19トレンチ、25・26トレンチ、31トレンチでは奈良・平安時代の土師器片と須恵器片がダンボール箱で１箱分出土した。なお、Ｂ区の37～39トレンチでは、すべてのトレンチで遺構・遺物が確認されなかった。

この結果により、洗平（２）遺跡近接地並びにふくべ（３）遺跡隣接地については、工事施工に際して本発掘調査の必要はないと判断された。

ふくべ（４）遺跡については、遺構・遺物の確認がなく、かつ、かつての削平による改変の痕跡が認められた37～39トレンチの所在する調査対象範囲（Ｂ区）を除き、１～36トレンチの所在する調査対象範囲（Ａ区）は、記録保存のための本発掘調査を要すると判断された。

図１　ふくべ（４）遺跡・ふくべ（３）遺跡・洗平（２）遺跡の位置

**【ふくべ（４）遺跡】** 4トレンチ北東壁

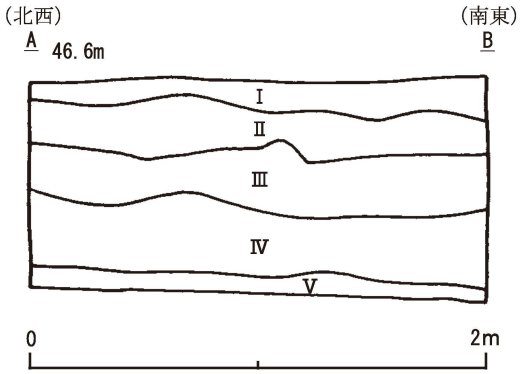



第Ⅰ層 黒褐色土　10YR2/3　表土
第Ⅱ層 黒褐色土　7.5YR2/2
第Ⅲ層 黒 色 土　10YR2/1
第Ⅳ層 明黄褐色土　10YR7/6　中掫浮石層
第Ⅴ層 黒褐色土　10YR2/2
第Ⅵ層 黒褐色土　10YR3/2
第Ⅶ層 黄褐色土　10YR5/6　ローム層

**【ふくべ（３）遺跡隣接地】** 40トレンチ北壁

第Ⅰ層 黒褐色土 10YR3/1
第Ⅱ層 青灰色土 5BG5/1　泥炭層

**【洗平（２）遺跡近接地】** 2トレンチ北東壁




第Ⅰ層 黒褐色土　10YR3/1　表土
第Ⅱ層 黒褐色土　10YR2/2
第Ⅲ層 黒 色 土　10YR2/1
第Ⅳ層 暗褐色土　10YR3/4　中掫浮石混入
第Ⅴ層 黄褐色土　10YR5/6　ローム層

**図２　ふくべ（４）遺跡・ふくべ（３）遺跡隣接地・洗平（２）遺跡近接地の基本土層**

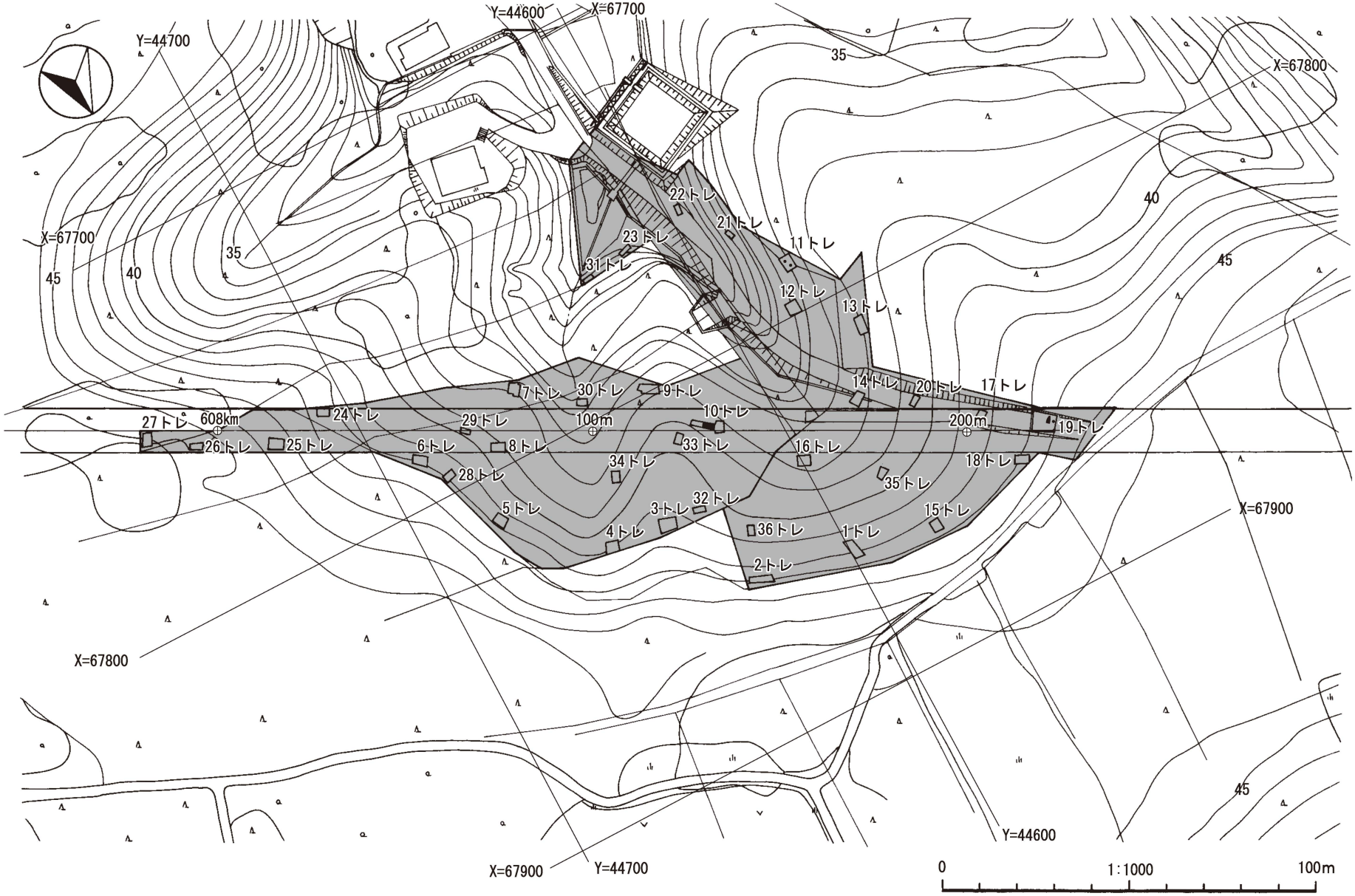



図３　ふくべ（４）遺跡（Ａ区）試掘調査のトレンチ配置

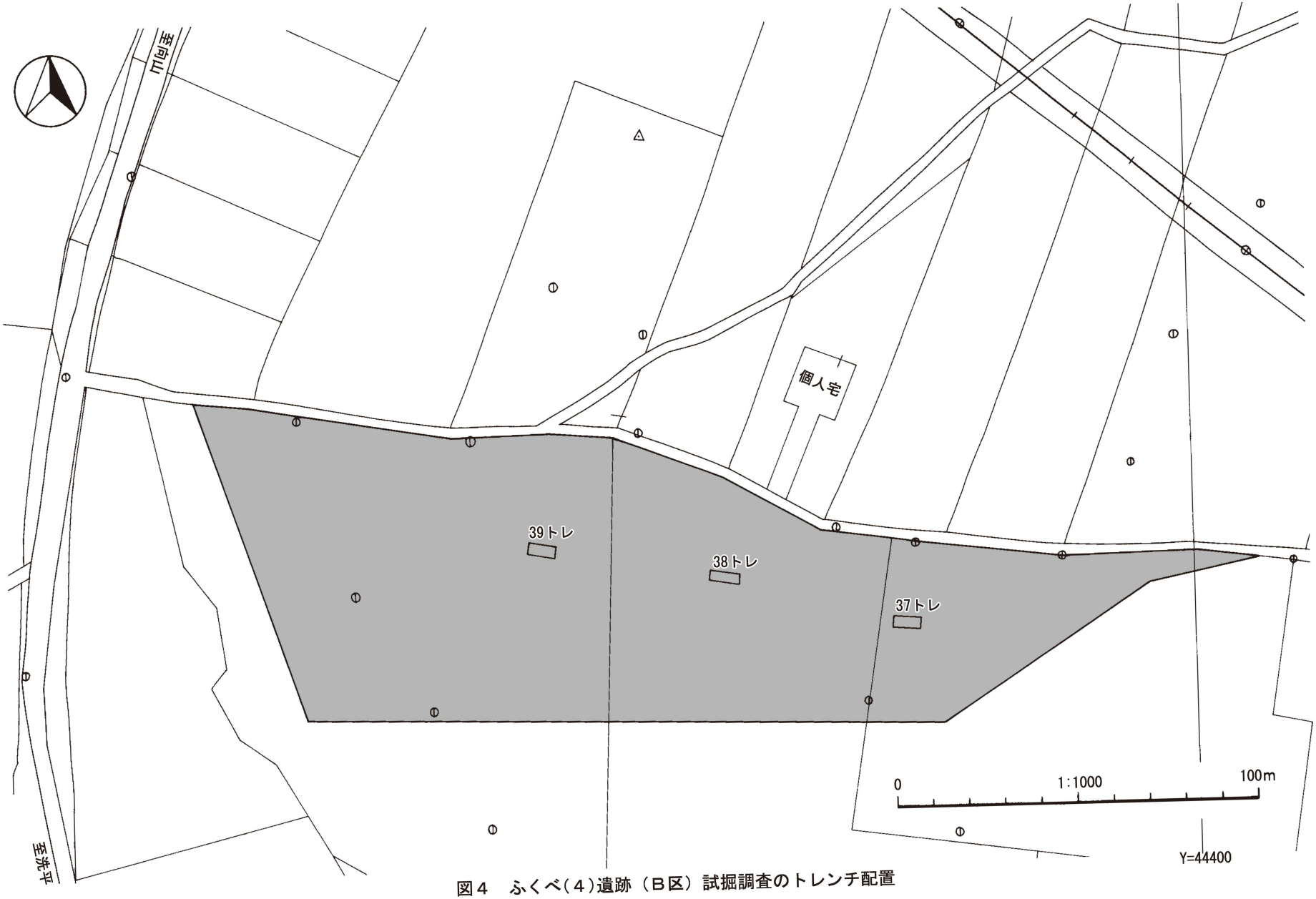



図４　ふくべ（４）遺跡（Ｂ区）試掘調査のトレンチ配置

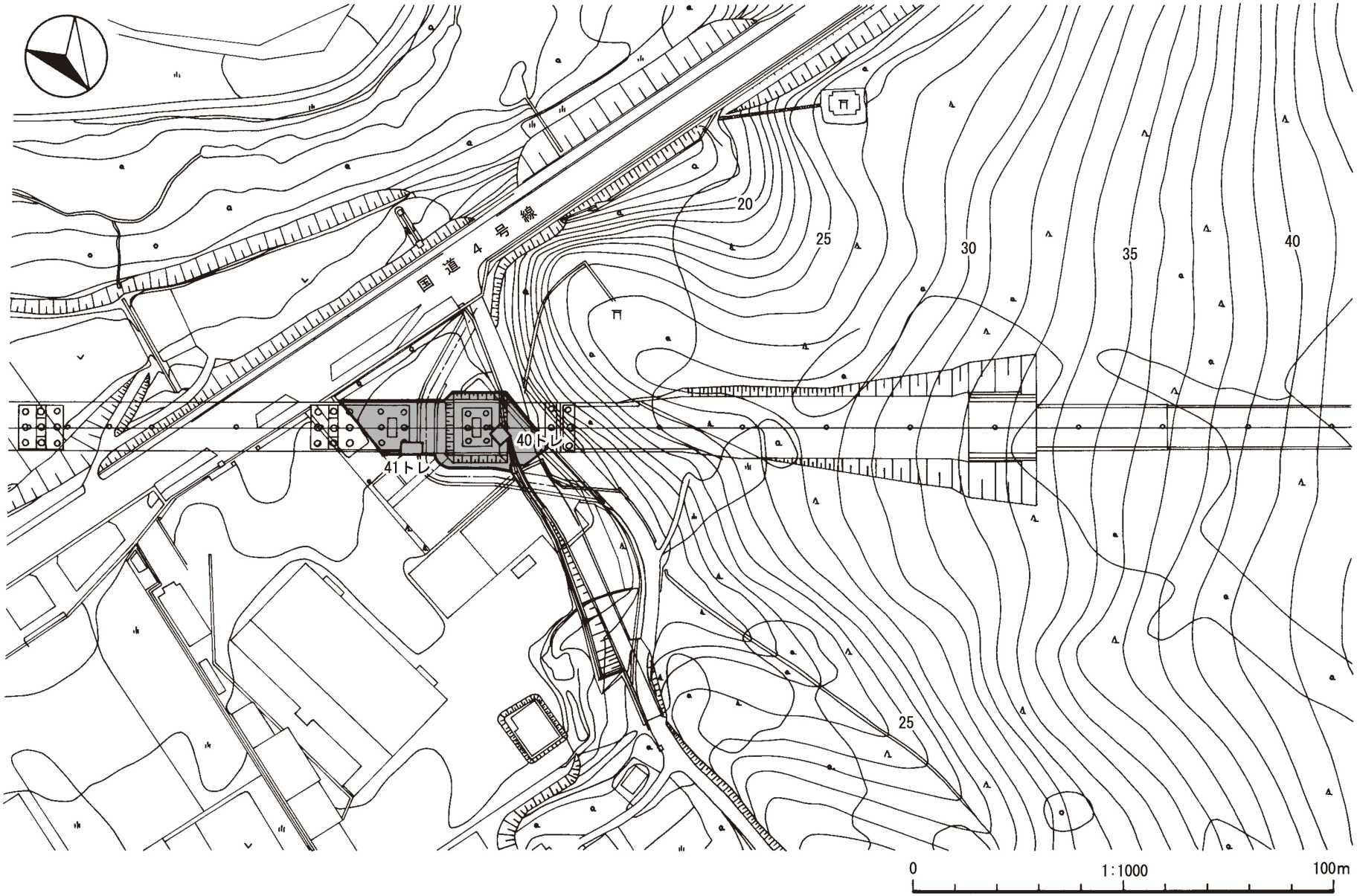



図５　ふくべ（３）遺跡隣接地試掘調査のトレンチ配置

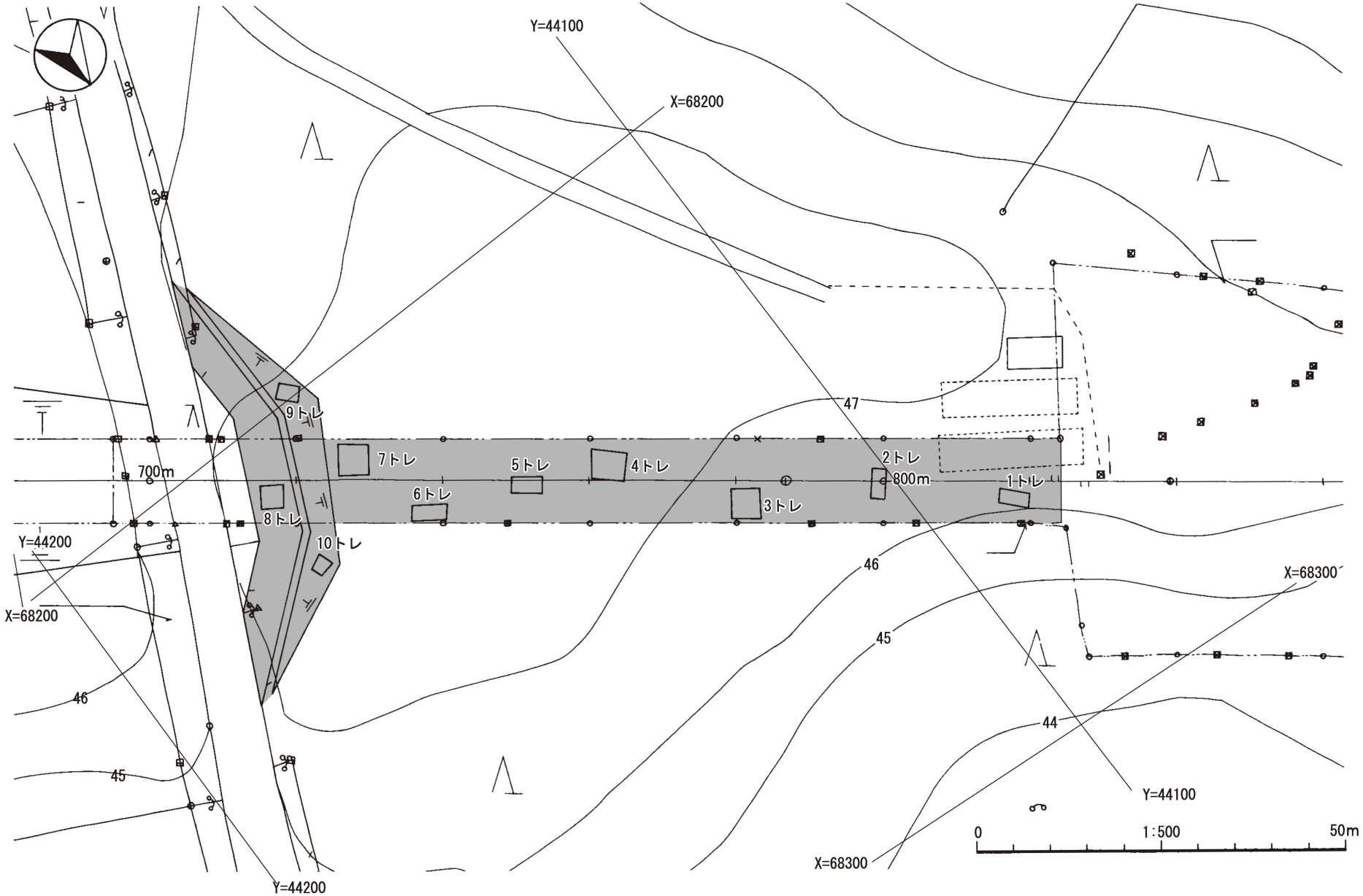



図６　洗平（２）遺跡近接地（Ａ区）試掘調査のトレンチ配置

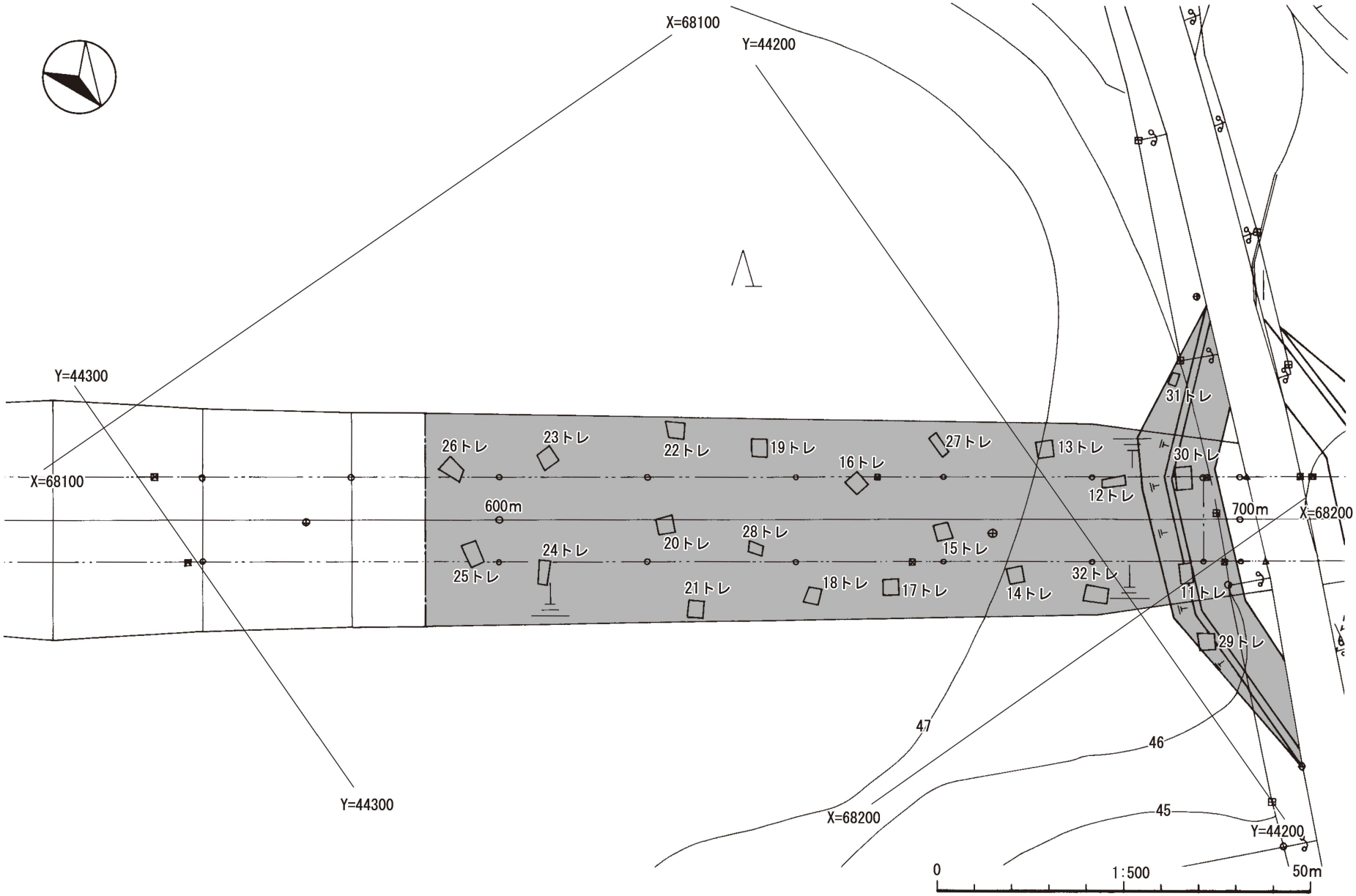



図７　洗平（２）遺跡近接地（Ｂ区）試掘調査のトレンチ配置

# ふくべ（3）遺跡

# 第１章　調査の概要

## 第１節　調査に至る経緯

日本鉄道建設公団（現：独立行政法人鉄道建設･運輸施設整備支援機構）による東北新幹線盛岡以北の建設計画に伴って、青森県教育委員会は平成３年度から建設予定地の分布調査を行い、埋蔵文化財の取り扱いについて事業者側と協議を続けてきた。その結果、青森県内の埋蔵文化財発掘調査は平成５年から実施され､平成10年度までに東北新幹線三戸～八戸間に所在する８遺跡の調査が終了した。

東北新幹線八戸～新青森間の建設予定地に所在する埋蔵文化財の発掘調査は、平成11年度から開始され、本報告書所収のふくべ（３）・（４）遺跡については平成14・15年に発掘調査が実施された。その後、平成17年になって、ふくべ（３）遺跡では平成15年度調査区域の延長部分の調査を事業者側から要望され、関係機関の調整を経て、用地買収の完了する平成18年６月から発掘調査を行うこととなった。

## 第２節　調査要項

1　調査目的　　東北新幹線建設事業に先立ち、当該地区に所在するふくべ（３）・（４）遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2　発掘調査期間　　平成18年６月１日から同年10月26日まで

3　遺跡名及び所在地　　ふくべ（３）遺跡（青森県遺跡番号48009）
上北郡おいらせ町瓢245－26ほか

4　調査面積　　1,200㎡

5　調査委託者　　独立行政法人　鉄道建設・運輸施設整備支援機構

6　調査受託者　　青森県教育委員会

7　調査担当機関　　青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査体制

| | | |
|---|---|---|
| 調査指導員 | 藤沼　邦彦 | 国立大学法人　弘前大学人文学部教授（考古学） |
| 調　査　員 | 高島　成侑 | 前八戸工業大学教授（建築史） |
| | 椿坂　恭代 | 札幌国際大学博物館（植物学） |
| | 柴　　正敏 | 国立大学法人　弘前大学理工学部教授（地質学） |

| | | |
|---|---|---|
| | 工藤　雅樹 | 東北歴史博物館館長（考古学） |
| | 伊藤　博幸 | 奥州市埋蔵文化財センター所長（考古学） |
| 調査担当者 | 青森県埋蔵文化財調査センター | |
| | 所　長 | 白鳥　隆昭（現：青森県立郷土館長） |
| | 次　長（調査第１ＧＬ） | 三浦　圭介（平成19年３月退職） |
| | 総務ＧＬ | 桜庭　孝雄 |
| | 調査第１ＳＧＬ | 畠山　　昇 |
| | 文化財保護主事 | 永嶋　　豊（現：青森県教育庁文化財保護課文化財保護主事） |
| | 文化財保護主事 | 佐藤　智生（現：文化財保護主査） |
| | 調査補助員 | 戸田　久恵　　高橋　真澄 |
| | | 蔦川　貴祥　　鹿内　大嗣 |

## 第３節　調査方法

### １．グリッドの設定

平成15年度に実施した調査との整合性を図るため、日本測地系座標を用い、４×４ｍのグリッドを設定した。原点Ａ－０は、ふくべ（４）遺跡内にある日本測地系座標X＝67,640　Y＝44,880であるが、南北方向はアルファベットの数を超えるため、Ｚの次をＡＡとしＡＡ～ＡＺ、ＢＡ・・・のように２文字を組み合わせたものを使用し、ＡＺ－60グリッド・ＢＡ－60グリッドのように呼称した。レベル原点は、ふくべ（４）遺跡地内にある３級水準点から移動して設置している。

### ２．遺構検出

調査はグリッド法を用いた分層発掘を基本とした。掘り下げについては人力を基本としたが、状況に応じて重機を使用したほか、排土の移動についても重機を使用している。

遺構検出は基本層序ごとに注意して行ったが、調査区上部の土壌は遺構確認の難しい黒色土であったため、この面で見落としたものについては、更に下層で確認するよう努めた。結果、基本的には黒色土～中掫浮石層（第Ⅲ～Ⅴ層）で確認・精査し、最終確認を黄褐色火山灰層（第Ⅶ層）で行う形となった。

### ３．遺構の調査

遺構名は、竪穴住居跡＝ＳＩ、溝跡＝ＳＤ、円形周溝＝Ｅ－ＳＤ、土坑＝ＳＫ、溝状土坑＝ＳＶ、掘立柱建物跡＝ＳＢ、焼土遺構＝ＳＮ、性格不明遺構＝ＳＸ等の略号を適宜用いた。原則的に検出順に番号を付したが、調査・報告時の進展に伴い、遺構名の変更や欠番が生じている場合もある。なお、本報告において、こうした略号は基本的に用いていないが、観察表や各種分析結果には、それらが反映されている場合がある。

遺構の精査は、二分法及び四分法を基本としたが、遺構の状況に応じてサブトレンチ等を設けた。

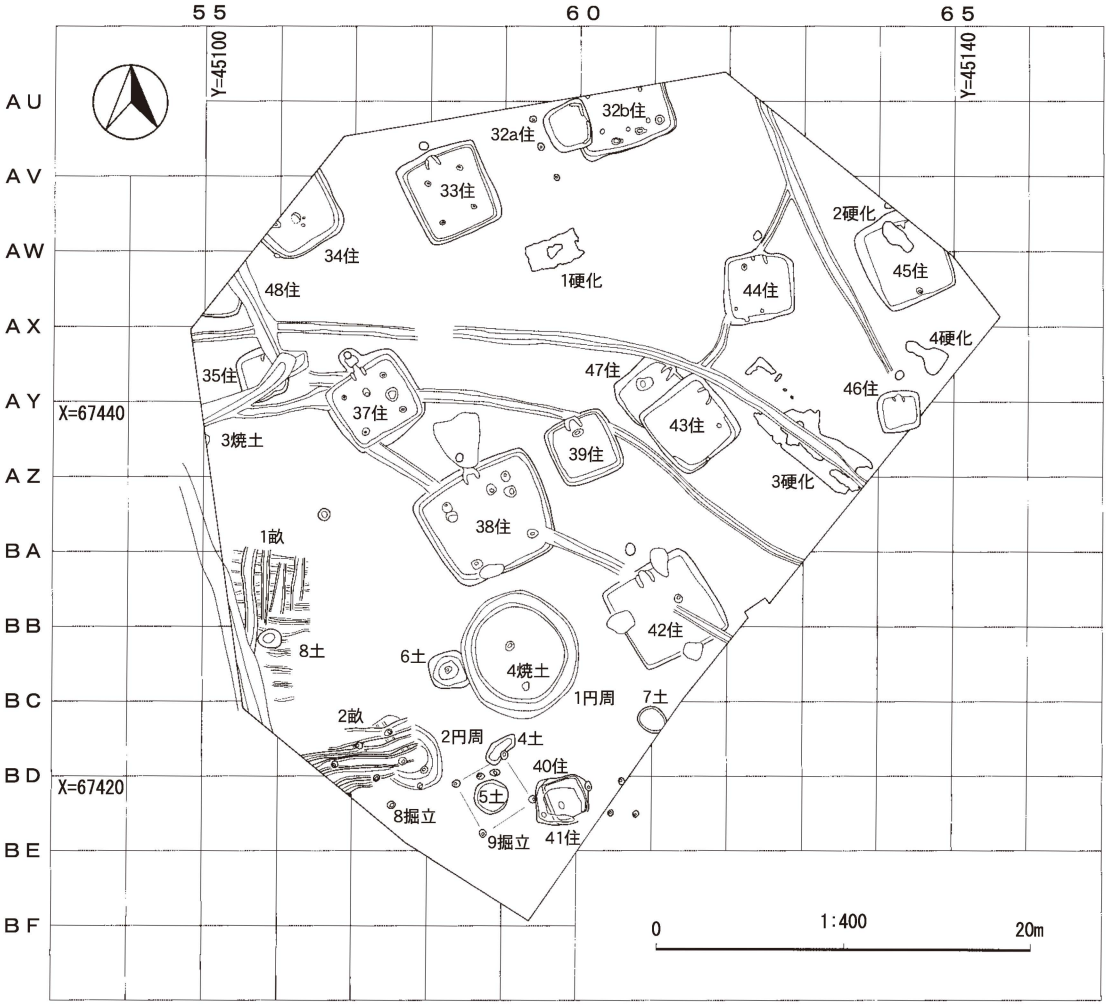



図８　遺構配置

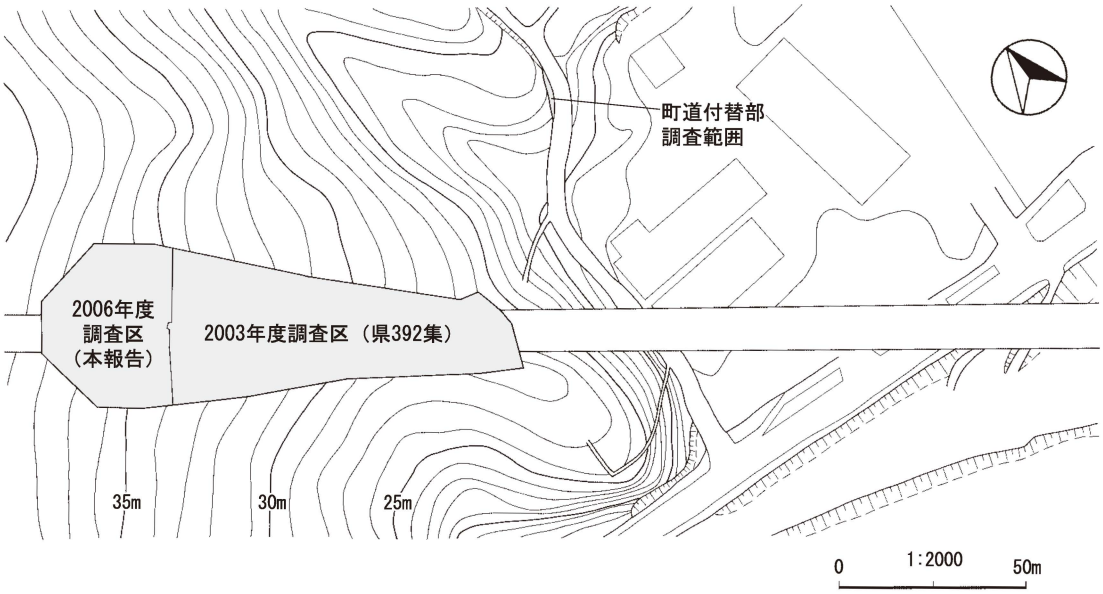



図９　調査区周辺の地形

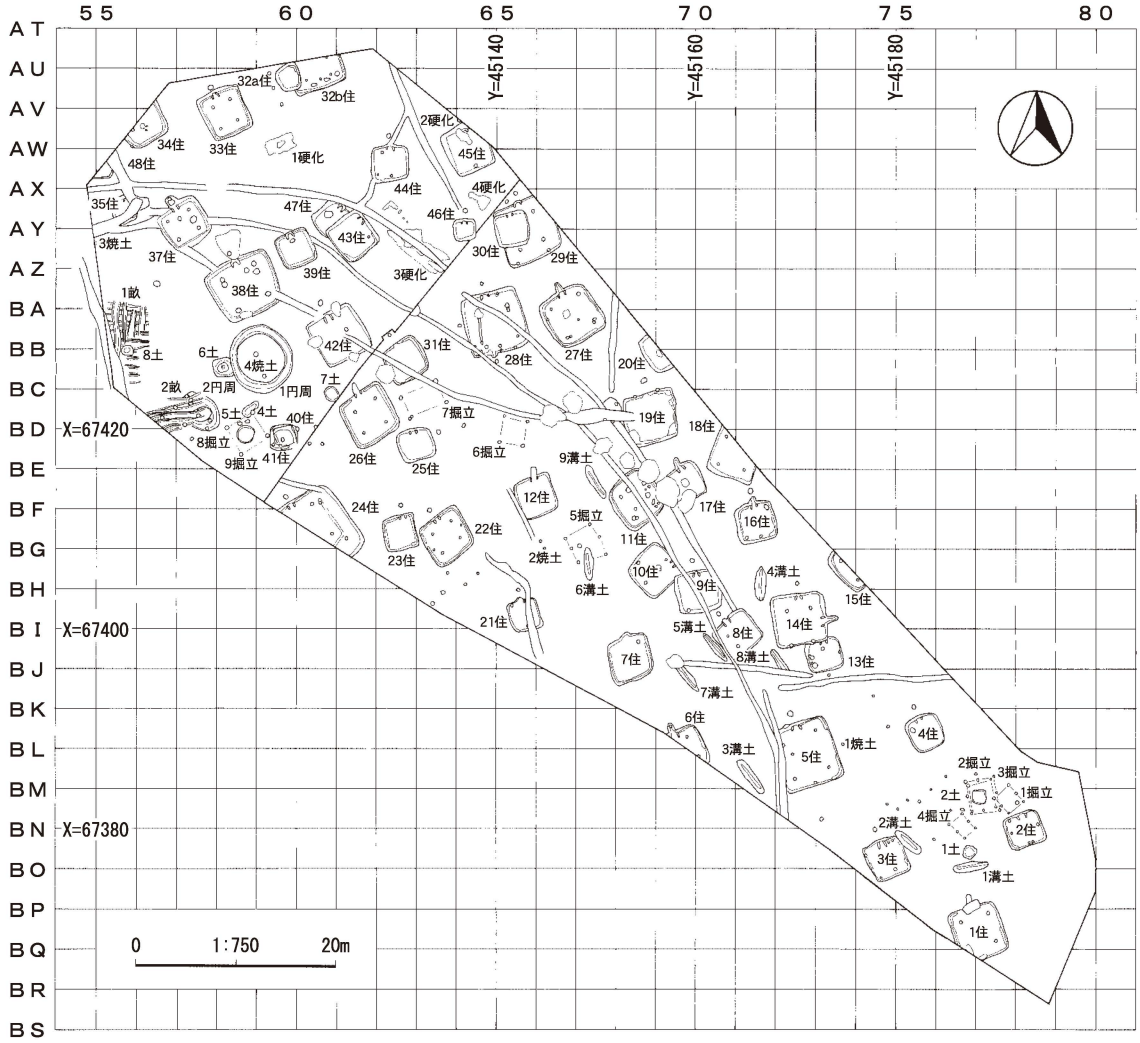



図10　2003年度及び2006年度検出遺構

測量については、遺構実測支援システム（アイシン精機㈱）を用いた光波測量のほか、簡易遣り方測量（1/10・1/20主体）も適宜併用している。

## 4．出土遺物

遺構外出土遺物はグリッド単位で層ごとに、遺構内出土遺物は各層を基本としながらも、適宜、床面などの出土位置を名称に付して取り上げた。また、必要に応じて、出土地点や高さを記録したドット図及び微細図を作成した。ドット図作成の際には、報告書作成時における遺物の垂直分布図作成を視野に入れ、遺構実測支援システム（アイシン精機㈱）を用いた。

なお、遺構内遺物の検出作業時に原位置が不明となった遺物に関しては、単に覆土出土とした場合が多い。また、当初は遺構と判断されず、遺構外として取り上げた遺物についても、遺物の注記は特に改めていない。更に、調査終了時の図面修正作業等において、層番等の変更があった場合においても、土器の注記を改めていない。

### ５．土層観察

土層観察にあたっては『新版標準土色帖』を用い、土色とマンセル記号を併記し、混入物等の特徴を記録した。遺構の堆積土は算用数字、遺跡内の基本堆積土についてはローマ数字で表記した。

### ６．写真撮影

35mmモノクロネガ（ISO100）とカラーリバーサル（ISO100・400）の２種類のフィルムとデジタルカメラを使用し、作業状況、土層堆積状況、遺物出土状況、完掘状況等について撮影した。

## 第４節　調査経過

### １．調査主担当

６月１日～８月11日まで中嶋友文と神康夫が、８月17日～10月26日までは佐藤智生（蔦川貴祥が補佐）が行った。

### ２．調査経過

６月１日、調査機材等を搬入。各種設営を行った後、表土（Ⅰ層）を掘り下げる。Ⅱ層以下は移植ベラによる緻密な遺構確認を行ったところ、６月30日までに竪穴住居跡８・溝跡・円形周溝１・畝状遺構２・硬化面１を検出。調査終了の８月11日には、更にⅣ～Ⅴ層まで掘り下げ、最終的には竪穴住居跡14・溝跡・円形周溝２・畝状遺構２・硬化面３・土坑２（うち精査終了は土坑１）が確認された。この間、７月26日に小・中学生を対象とする親子体験発掘を実施している。

８月17日、ふくべ（４）遺跡より佐藤と蔦川が入り、上記の引継ぎ・確認を始めた。大半の遺構は覆土の途中まで掘られているような状態だったため、先ずはセクションベルトの除去と炭化材・遺物の取り上げを行いつつ、壁面・床面・カマド等を適宜精査した。引継ぎ直後、第34号住居跡よりガラス玉が出土し、現場が俄に活気づいた。途中、新たな竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されたものの、急いで作業した結果、10月初旬には、ほとんどの遺構が精査終了。10月上旬より重機を導入しながらⅤ層を除去し、Ⅶ層で遺構確認を行ったが、新たに検出した遺構は皆無に等しかった。調査中、植林されていた杉の抜根に悩まされはしたものの、事業者からの全面的な重機提供もあり、調査区の埋め戻しまで滞りなく作業は行われた。この間、10月７日に一般市民に対する現地説明会を行った。前日から続く記録的な集中豪雨により、各地で河川の氾濫等が報告されるなど大変な状況だったため、内容を変更・縮小せざるを得なかったものの、一般市民十数名の参加があり、その内容は一部のマスコミによって報道された。

# 第２章　遺跡の環境

## 第１節　遺跡の位置

八戸自動車道下田百石I･Cから国道45号線を西へ4.5km、奥入瀬川（相坂川）河口から約10kmの丘陵地にふくべ遺跡群は点在している。本遺跡一帯は、小規模な尾根や谷が起伏ある景観を形作っており、南西に階上岳、南に名久井岳、目の前に奥入瀬川を望むことが出来る。現在、遺跡一帯は杉林で覆われ、若干、畑などが耕されているといった状況である。遺跡の南側には、比較的古くから存在する新敷集落や1970年頃より造成された錦ヶ丘団地が存在している。

さて、今回の調査区は、前回の調査区の西隣に位置し、一定の高低差がある。東には鉄工場やパン工場、南は国道45号線を挟んで新敷集落を見下ろす台地上に位置し、将来的には新幹線トンネルの開口部となる。付近には、未だ埋まり切っていない竪穴住居らしき凹地も散在している（付図等を参照）。

## 第２節　地形・地質

遺跡周辺は天狗岱段丘・高舘段丘・柴山段丘・折茂段丘などの洪積段丘群によって台地が形成されており、これに小規模な谷や沢の入り込む起伏ある景観が形作られている。今回の調査区は、前回同様、奥入瀬川を望む高舘段丘の南縁部と谷部に該当する。基本土層についても、前回の調査と同じく下記のとおりとなる。以上、本節の内容については、前回の報告あるいは旧下田町内の発掘調査報告で多数触れられているため、概要を述べるに留めた。

Ⅰ層　表土。やや粘性に富む、黒褐色の有機質シルト状土層で、場所によってはⅡ層も含まれる。厚さは20～50cm程度。

Ⅱ層　黒褐色土（10YR2/2）。表土直下に形成され、草木根などをよく含む。遺跡内では部分的にみられ、厚さ10～15cm前後。歴史的には古代以後の層とされる。

Ⅲ層　黒色土（10YR2/1）。十和田ｂ降下火山灰に由来する灰白色浮石粒（粒径数mm）が含まれる。厚さは20～30cm前後。縄文時代晩期～奈良・平安時代の土層とされる。

Ⅳ層　黒色土（10YR2/1）ないし黒褐色土（10YR3/2）。下部にⅤ層由来の浮石粒が多い。厚さ20～30cm前後。縄文時代前～後期頃の層とされる。

Ⅴ層　中掫浮石砂層（黄橙色（10YR8/6））とこれが上下に漸移する暗褐色土層（10YR3/3）を一括した。厚さ30～40cmであり、縄文時代前期頃の層とされている。

Ⅵ層　黒褐色土(10YR2/2～3/1)。粘性あり。上位Ⅴ層に由来する浮石砂、下位に由来する黄橙色（10YR8/6）浮石、褐灰色（10YR6/1）岩片が含まれる。厚さ20～30cm。

Ⅶ層　黄褐色・にぶい黄褐色・褐色などからなる褐色火山灰質土層。下位由来の黄橙色浮石（10YR8/6）、褐灰色（10YR6/1）岩片を含む。厚さ20～60cm。

Ⅷ層　八戸火山灰Ⅴ層。厚さ20cm前後。

Ⅸ層　八戸火山灰Ⅳ層。通称、ゴロタ。黄褐色～黄橙色の浮石層である。10mm前後の浅黄橙色

～灰白色浮石と５mm前後の明黄褐色～灰白色浮石および黒褐色の岩片の混合層で、浮石粒は堅いが粒子間の膠結（結合）が弱いためにもろく崩れやすい。厚さ25～30cm。

Ⅹ層　八戸火山灰Ⅰ～Ⅲ層を一括する。灰白色を主体とし、下部は粘性に富む火山灰層。粒径10～20mm前後の浮石が散在。厚さ45～60cm。

Ⅺ層　高館火山灰層。GL－1.6～1.80ｍ以降。明褐色～淡褐色の火山灰質の粘性土である。

# 第３章　遺構・遺物

今回の調査では、住居跡17軒（32ａ～48号）、掘立柱建物跡２棟（８・９号）、円形周溝２基（１・２号）、土坑５基（４～８号）、溝跡（遺構番号付さず）、畝状遺構２条（１・２号）、硬化面４ヶ所（１～４号）、Pit（遺構番号付さず）、焼土遺構２ヶ所（３・４号）に加え、遺構の内外からダンボール（44×34×23cm）80箱分の遺物が出土した。調査区は以前調査した2003年の調査区に隣接し、やはり前回と同じく遺構が密集していたが、事前の地表面観察では周辺にあるような竪穴住居らしき凹地は一切確認されなかった。

以下、本章では、上記の遺構・遺物について時代別にその内容を記す。遺構・遺物の主な属性や観察結果については、巻末の表に適宜纏めることとする。

## 第１節　縄文時代

遺構・遺物とも僅かである。土坑１基と遺物少量が確認されたに過ぎない。

### ａ．遺　構

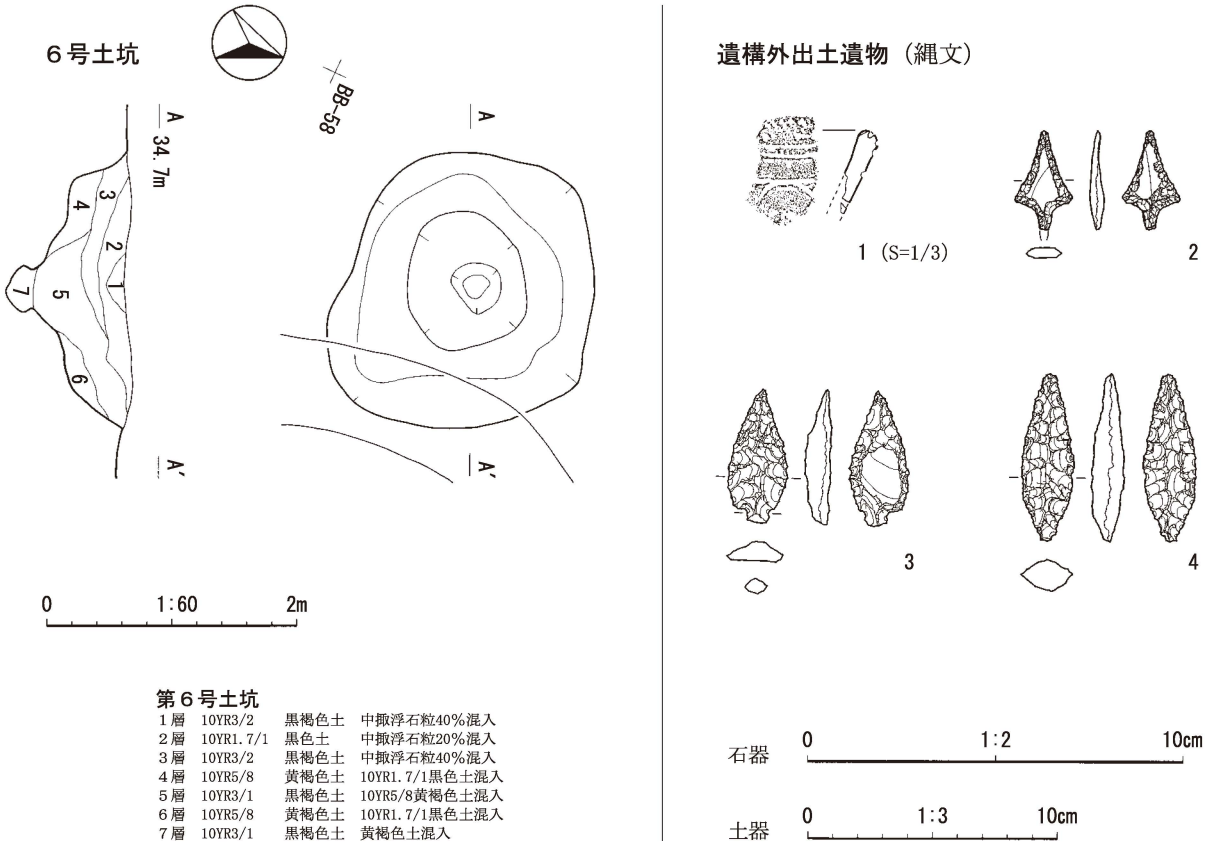
第６号土坑のみが該当する（図11）。遺物は伴わなかったものの、底面中央部にPitが設けられている形状から、当該期のものと考えた。確認面がⅤ～Ⅵ層、底面がⅧ層となる。

### ｂ．遺　物

遺構外および古代以後の遺構内から土器と石器が少量出土した（図11）。１は貝殻文が施された早期の物見台式土器である。このほか、石鏃３点が確認されている。

## 第２節　古　　代

この時代に該当する遺構・遺物は、調査区全域にわたって密に検出されており、前回の報告同様、本遺跡の核となる。遺構は、竪穴住居跡を中心に、掘立柱建物跡、土坑などによって構成されており、一部に焼失家屋が散見される。遺構の時期は、７～９世紀代に属し、７世紀中葉、７世紀末～８世紀初頭、９世紀中葉～後葉がピークとなる。なお、当該期の遺構同士が重複する事例は少ない。そして、当該期の遺構の全てが後述する時期不明の硬化面や調査区全体に広がる溝よりも古い段階に構築され




第６号土坑

| | | | |
|---|---|---|---|
| １層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 中掫浮石粒40%混入 |
| ２層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 中掫浮石粒20%混入 |
| ３層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 中掫浮石粒40%混入 |
| ４層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | 10YR1.7/1黒色土混入 |
| ５層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 10YR5/8黄褐色土混入 |
| ６層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | 10YR1.7/1黒色土混入 |
| ７層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 黄褐色土混入 |

**図11　第６号土坑・遺構外出土遺物**（縄文）

ていることが解る。出土遺物は、土師器が圧倒的に多く、須恵器、土製品、石器、石製品・金属器などがこれに続く。

なお、本節に関わる部分で今回実施した理化学的分析は、下記のとおりである。降下火山灰については、前回の報告で傾向がほぼ把握されたこともあり、理化学的な同定は行っていない。

・炭化種実同定（各住居跡カマド内の土壌が主体）

・炭化樹種の同定（32ｂ・33・42号住居跡出土の炭化材）

・蛍光Ｘ線による土師器・須恵器・ガラス玉・カマド構築材（カマド本体の白色粘土）の成分分析

ａ．住居跡

計17棟を報告する。個別の遺構について述べる前に、主な留意点に触れる。

〔重　複〕　古代の住居跡同士として、32ａ号＞32ｂ号、43号＜47号の２件を確認した。

〔カマド〕　32ａ号と40号は存在しない。32ｂ・34・48号は調査区外に存在している可能性がある。また、41号の火床面は他とは異なった状況を示している（後述）。いずれも、便宜上、住居跡とした。

〔遺構番号〕　31号まで報告されているため、本報告では32号からとする（36号は欠番）。なお、32号については、当初、重複関係が把握されていなかったため、後に32ａないし32ｂ号として区別した。よって、遺物の注記が区別されていないものもある。この他、調査時と報告時で遺構の名称を変更したものがある。すなわち、41号の一部の遺物については、調査時にSX−01としており、それらも遺物の注記などに反映されている。

**第32ａ号住居跡**（図12）

〔概　要〕　カマドが存在しない平安期の小規模な建物跡。十和田ａ火山灰降下以前に廃絶。９世紀中葉～後葉の可能性が高い。

〔重　複〕　７世紀後半代と目される32ｂ号住居跡より後出。その上部を部分的に破壊している。

〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形である。床面はⅦ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。32ｂ号住居跡との重複部分に壁溝が存在する。

〔カマド〕　認められなかった。元より存在しないものと考えられる。

〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様である。１層に十和田ａ火山灰が少量堆積している。

〔遺　物〕　断片化した土師器片が少量と軽石の加工品１点が出土した。掲載遺物はいずれも覆土中からの出土であり、各個体の残存率も低い。１は特徴等から32ｂ号住居跡からの流れ込みと思われるが、２は平安期の特徴を備えており、重複関係や降下火山灰の堆積状況と並び、本住居跡の年代を推定させる要素となる。

**第32ｂ号住居跡**（図13～16）

〔概　要〕　７世紀後半ないしは７世紀末～８世紀初頭頃（宇部Ⅱ～Ⅲ群）の焼失家屋。炭化材同定により、上屋構造にコナラ属コナラ節が多用されていたことが解る。住居焼失に明確に伴う遺物は少ないものの、炭化材層の直上部には人為堆積層が形成されたと同時に、７世紀末～８世紀初頭頃の遺物が多く投げ入れられた模様である。住居内土坑の内部に白色粘土が貼られる特徴がある。

〔重　複〕　９世紀中葉～後葉と目される32ａ号住居跡により、遺構および覆土上部が失われる。

〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形と目されるが、一部、調査区域外にあるため、定かではない。床面はⅧ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。壁際には壁溝が巡り、住居中程に主柱穴および小規模な土坑が存在する。

〔カマド〕　調査区外に存在する可能性がある。

〔柱　穴〕　５基確認された。深さは11～88cm程度であり、底面は概ねⅧ層となる。

〔住居内土坑〕３基存在する。不整形気味のものも存在するが、形状・深さは共に似通っている。３基とも底面をⅧ層とした上に、厚さ数cmの白色粘土が貼られている。

〔堆積土〕　住居焼失後、主に自然堆積を経て埋没した模様であるが、一部に土器を多く含んだ人為堆積層も形成されている。すなわち、床面を覆う６層に炭化材が多く混入し、その上部にあたる３・５層に褐色土（Ⅶ～Ⅷ層）と土器片を多く含んだ人為堆積層が広がる。特筆すべき降下火山灰は見当たらない。

〔炭化物〕　床面から床面直上で確認された。18点を同定した結果、コナラ属コナラ節が16点、クルミ属１点、イボタノキ属１点という内容であった。

〔遺　物〕　比較的多数の土師器に加え、軽石の加工品と鉄製品が出土している。このうち、７を住居焼失に伴う炭化材層と同程度の標高で確認した。そのほかは、大半が３層ないし５層に形成された人為堆積層から出土した焼成軟質で白色系の色調を呈す個体である。これらは、７世紀末～８世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の土器群である。ただ、７・11・12・15に関しては、赤褐色系の色調を呈すもの、あるいは内面にミガキを有す甕など、７世紀中葉頃（宇部Ⅱ群）に近い特徴を備えているように思われる。

**第33号住居跡**（図17～21）

〔概　要〕　7世紀後半頃（宇部Ⅱ～Ⅲ群）における焼失家屋である。炭化材の同定結果より、上屋構造にコナラ属コナラ節が多用されていたことが解る。焼失に伴ったと考えられる遺物が一定量確認されている。

〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形である。床面はⅧ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。住居中程に4基の主柱穴があり、壁際には壁溝が巡る。

〔柱　穴〕　Pit 1～4が主柱穴となる。深さは64～70cm程度であり、底面はⅧ層まで達する。

〔カマド〕　煙道部の構造は地下式であり、白色系粘土によってつくられた天井の一部と袖が検出された。火床面に小型の土師器甕を伏せて転用した支脚が1つ残されていたが、この設置位置から推測すると、本来、もう1つの支脚を有す2つ掛けのカマドだったと考えられる。

〔堆積土〕　住居焼失後、主に自然堆積を経て埋没した模様であり、床面を直に覆う3・5層に住居焼失時の炭化材が含まれる。特筆すべき降下火山灰は見当たらない。

〔炭化物〕　床面から床面直上で確認された。19点同定した結果、コナラ属コナラ節が16点、キハダ属1点、イボタノキ属1点のほか、草本1点が確認された。草本は屋根材に用いられたカヤなどの可能性も考えられる。

〔遺　物〕　土師器・紡錘車・砥石・礫が出土した。掲載遺物の出土位置は、4がカマド支脚、10がカマド煙道部、2・3・5・7・8・9・11が炭化材層下部の床面上、6が炭化材層の上部である。カマドおよび炭化材層下部から出土した土師器は、内面調整にミガキが確認され、赤褐色系の色調を呈し、残存率も高い傾向にある。7世紀後半頃（宇部Ⅱ～Ⅲ群）に属すものであろう。これに対し、炭化材層上部から出土したものは、上記の特徴が認められず、白色系の色調を呈す。加えて、残存率も低い。こちらは、7世紀末～8世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）のものが住居の埋没過程で混入したと考えられる。特筆すべき遺物として、9は住居焼失時の被熱作用により、蔓などの有機繊維が巻かれていたような痕跡が表面に現れている。しかし、道具としての使用痕跡はあまり明確ではない。

**第34号住居跡**（図22～24）

〔概　要〕　7世紀末～8世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の住居跡。大半が調査区域外に及んでいるものの、ガラス玉や装飾的な土師器甕など、他には認め難い製品が存在するのが最大の特徴である。床面中央付近に、炉跡に類似した焼土範囲が確認された点も、数少ない事例といえよう。なお、ガラス玉1点の発見により、床面付近の土壌を採取・水洗したが、他は検出されなかった。

〔重　複〕　住居埋没後に掘り込まれた後世のPitにより、床面の数カ所が破壊されている。

〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形と目されるが、一部が調査区域外にあるため、定かではない。床面はⅤ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。壁際には壁溝が巡るが、主柱穴は特に見当たらない。住居中程には小規模な土坑が存在する。

〔カマド〕　調査区外に存在する可能性がある。その場合、地下式のカマドが多い段階の住居跡ではあるが、煙道部が極端に短い半地下式の構造になる可能性も捨て切れない。なぜなら、床面中央付近に炉のような施設を持つ住居跡の場合、半地下式ないし無煙道式の煙道部構造となる割合が多いからである（前回報告の7号住居跡および今回報告の39号住居跡を参照のこと）。

〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様であるが、２層に褐色土（Ⅶ～Ⅷ層）を主体とする人為堆積層が形成される。特筆すべき降下火山灰は見当たらない。
〔焼　土〕　住居焼失に伴う被熱を示す根拠が無いため、炉と判断される。住居中程と目される位置に存在し、床面が直に被熱している。小規模なPitによって部分的に破壊されているが、このPitとの重複関係および前後関係は調査中に確認できなかったため定かではない。ただ、周辺から住居埋没時に形成されたPit１が確認されている事実を踏まえると、住居内外に存在する他のPitについても、本遺構に全く伴わない別時期のものと捉えることも可能となる。
〔遺　物〕　土師器・土製品・石器・石製品・ガラス玉が出土した。掲載遺物の出土位置は、１・３・４・５・７が床面～床面直上、８が壁溝覆土上層、それ以外が覆土である。床面出土の土器は、白色系の色調を呈し、７世紀末～８世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の特徴を備える。特に４は、口縁部に装飾的な波状が加えられており、口頸部にかけて少なくとも３つの段を有す。１も他の遺構には少ない形状であろう。また、６は、軽石製で穿孔こそ見当たらないものの、玉類を意識したかのようでもある。最も注目すべきは、８のガラス玉（青く気泡の入ったもの。酸化アルミを多く含むソーダ石灰ガラス製で管切り技法によるものと思われる）であり、こうした遺物が集落から出土すること自体、極めて稀である。他の遺物とともに、本住居跡の特殊性を感じさせる。

**第35号住居跡**（図25）
〔概　要〕　９世紀中葉以降の住居跡と考えられる。カマドが住居右側にやや片寄って設置されており、出入口らしき傾斜面が設けられているのが特徴。掲載遺物は少ないが、全て十和田ａ火山灰の降下以前に床面に存在していたものである。
〔重　複〕　住居埋没後に掘り込まれた後世の溝により、床面およびカマドと覆土の上部が破壊されている。
〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形である。床面はⅦ層を直に床とする。主柱穴・壁溝は特に見当たらない。
〔出入口〕　カマドとは対になる位置で確認された。表面の硬さは、床面と同様である。
〔カマド〕　煙道部の構造は地下式である。天井部は大部分失われているが、袖部同様、白色系粘土によって作られていたと考えられる。なお、支脚は存在していない。支脚の設置ならびに撤去等を窺わせるような窪みは確認されたものの、実際のところは定かではない。
〔堆積土〕　自然堆積を経て埋没した模様である。２層に十和田ａ火山灰が層状に確認される。
〔遺　物〕　掲載遺物の出土位置は全て床面上であり、１は９世紀中葉以降の土師器であり、カマドの右脇に正立していた。なお、覆土中にも若干の土師器細片が含まれていた。

**第36号住居跡**（欠番）

**第37号住居跡**（図26～30）
〔概　要〕　７世紀末～８世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の住居跡。カマドの残りが比較的良く、特徴的な構造が幾つかみられる。玉類およびこれに類似した遺物が３点出土している。

〔重　複〕　住居埋没後に掘り込まれた後世の溝により、遺構および覆土上部が破壊されている。
〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形である。床面はⅧ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。住居中程に4基の主柱穴があり、壁際には壁溝が巡る。
〔カマド〕　煙道部の構造は地下式。白色系粘土で構築された天井部が残存。煙道部の天井は、確認面から一段低い位置に作られている。煙道部先端の底面には、Pit状の落ち込みがあり、その住居本体側には、地山（Ⅷ層）を削り出すことによって作られた堤状の段差が設けられている。袖部は、火床面の左右に芯材となる土器が伏せられており、白色系粘土を貼り付けることで仕上げとしているが、下部および内部はⅧ層を削り出したものである。火床面付近には土師器を転用した支脚が2つ残されていたことから、2つ掛けのカマドだったといえる。
〔柱　穴〕　Pit 1～4が主柱穴となる。深さ44～67cm程度であり、底面はⅧ～Ⅹ層に達する。
〔住居内土坑〕2基存在する。共に底面をⅧ層とした上に、厚さ数cmの白色粘土が貼られている。
〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様である。1層に十和田a火山灰が層状に確認された。
〔遺　物〕　土師器・土製品・石器・石製品・鉄製品が出土した。掲載遺物の出土位置は、1がカマド内、11・12がカマド支脚、13・14がカマド袖部、5・10・15・22が床面、2が床面直上、それ以外が覆土である。カマドおよび床面出土のものは、7世紀末～8世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の特徴を持つ。また、19・20は、軽石製で穿孔こそ見当たらないものの、玉類を意識したかのようでもある。こうした遺物は、他の遺構には少ない。

**第38号住居跡**（図31～35）
〔概　要〕　7世紀末～8世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の住居跡。カマドの残りが比較的良く、遺物も比較的豊富である。
〔重　複〕　住居埋没後に掘り込まれた後世の溝や撹乱により、遺構や覆土上部が破壊されている。
〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形である。床面はⅧ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。住居中程に4基の主柱穴があり、壁際には壁溝が巡る。
〔カマド〕　煙道部の構造は地下式。白色系粘土で構築された天井部と袖部が残存。煙道部先端の底面にはPit状の落ち込みがあり、火床面の左右には芯材となる土器が伏せられている。火床面上には土師器を転用した支脚が2つ残されていたことから、2つ掛けのカマドだったといえる。
〔柱　穴〕　Pit 1～4が主柱穴となる。深さは61～77cm程度であり、底面はⅧ～Ⅹ層に達する。
〔住居内土坑〕3基確認。土坑3は、底面をⅧ層とした上に、厚さ数cmの白色粘土が貼られる。
〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様である。2層に十和田a火山灰が少量確認された。
〔遺　物〕　土師器・土製品・石器・石製品・鉄製品が出土した。掲載遺物の出土位置は、3・4がカマド支脚、7・8がカマド袖部、6がカマド上面、9が床面、5が床面直上、それ以外が覆土である。カマドおよび床面出土のものは、7世紀末～8世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の特徴を持つ。

**第39号住居跡**（図36～37）
〔概　要〕　7世紀末～8世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の住居跡。比較的残りの良いカマドは、煙道部が無きに等しい独特の構造となっている。床面中央付近に、炉跡に類似する焼土範囲が確認された点も、

他の住居には少ない特徴である。ただし、遺物の出土量は乏しい。

〔重　複〕　住居埋没後に掘り込まれた後世の溝により、遺構や覆土上部が破壊されている。

〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形である。床面は第Ⅶ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。壁際には壁溝が巡っているが、主柱穴は特に見当たらない。

〔カマド〕　天井部・奥壁・袖部表面は白色系粘土で作られており、袖部の内部は地山（Ⅶ層）を削り出したものである。住居の壁に直に接した状態で作り付けられており、天井部は住居の壁からせり出すようにして一部残存。他の住居とは異なる点として、排煙部が住居外に延びることは無い。それは念のため設けたトレンチでも確認している。なお、火床面付近には軽石を加工した支脚が２つ残されていたことから、２つ掛けのカマドだったといえる。

〔住居内土坑〕　１基存在する。底面をⅦ層とした上に、厚さ数cmの白色系粘土が貼られている。

〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様であるが、１層に黄褐色土（Ⅶ～Ⅷ層）を主体とする人為堆積層が形成される。なお、特筆すべき降下火山灰は見当たらない。

〔焼　土〕　住居中央部で床面の被熱が確認された。住居焼失に伴う被熱を示す根拠が無いため、34号住居跡同様、炉に近い施設と考えられる。

〔遺　物〕　土師器・土製品・石製品が出土した。掲載遺物の出土位置は、1（完形品）がカマド右脇の床面上、2が1の左脇のカマド崩落土直上（高さとしては床面直上）、３が床面、５・６がカマド支脚である。以上は、出土位置に関わらず、７世紀末～８世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の遺物で占められている。

**第40号住居跡**（図38）

〔概　要〕　カマドが存在しない小規模な建物跡。重複関係から９世紀中葉～後葉以前の構築・廃絶である。出土遺物からすると、７世紀末から８世紀代にかけての構築・廃絶も考えられる。

〔重　複〕　９世紀半ば過ぎから十和田ａ火山灰降下以前に構築・廃絶された41号住居跡に先行する。そのため、覆土上部が部分的に破壊されている。加えて、41号住居跡埋没後に上部から掘り込まれたPitによる部分的な破壊も認められる。

〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形である。床面は第Ⅶ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化されている。

〔カマド〕　認められなかった。元より存在しないものと考えられる。

〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様である。特筆すべき降下火山灰は見当たらない。

〔遺　物〕　断片化した数点の土師器片に加え、礫と軽石加工品が出土した。掲載遺物の出土位置は、４が床面、２・３が床面直上、１が覆土上層である。非掲載品も含め、土師器は全て７世紀末～８世紀代の製品であるが、遺構年代を決定づけるような在り方は見受けられないように思われる。

**第41号住居跡**（図39～42）

〔概　要〕　炉に類する施設を持つ小規模な建物跡。９世紀中葉～後葉の構築・廃絶と考えられる。須恵器が最も多く出土した遺構であるが、それらは断片化した状態で床面よりやや高い位置に散乱していた。土製支脚のように、他にはあまり例をみないものも出土している。

〔重　複〕　7世紀末から8世紀代の構築・廃絶された可能性のある40号住居跡を破壊し、構築されている。また、住居埋没後に上部から掘り込まれたPitによる破壊も部分的に認められる。
〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形。床面は40号住居跡の覆土を掘り込み、直に床としている。
〔カマド〕　下記にある被熱範囲は認められたものの、袖部等は確認されなかった。通常、袖部等に用いられる白色系粘土の遺存・散乱も確認できない。
〔焼　土〕　住居隅で床面の被熱が確認された。住居焼失に伴う被熱を示す根拠が無いため、炉に近い施設とみられる。周辺からは、対に配置されたと考えられる土製と軽石製の支脚も出土した。
〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様である。2層に十和田a火山灰が少量確認された。
〔遺　物〕　土師器・須恵器・土製品・石製品が出土した。多くの遺物は床面直上付近に散乱していたが、主体となるのは須恵器である。このうち、3ｂが25号住居跡、3ｃが24号住居跡、3ｄが24ならびに25号住居跡というように、前回の調査・出土資料と遺構間で接合する。参考までに、本遺構からの大凡の距離は、24号住居跡までが6ｍ、25号住居までが15ｍである。なお、本遺構のように須恵器が集中・散乱して出土する状況は、前回の調査・報告でも確認されておらず、特異な例となる。この他、5・6は炉と考えられる焼土範囲付近により添った位置から出土していることから、支脚として用いられていた可能性が高い。1は、補修孔らしき特徴を持つ7世紀末～8世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の土師器片である。以上、出土遺物の大半は、9世紀中葉～後葉のもので占められている。

**第42号住居跡**（図43～49）
〔概　要〕　9世紀中葉～後葉の住居跡。床面およびカマドからの遺物出土量が多く、土師器の高台坏や出羽型（北陸型）長胴甕など、他では稀な遺物が散見される特徴がある。灯明皿として使われたロクロ坏や断片化した刻書土器も出土している。
〔重　複〕　住居埋没後に掘り込まれた後世の溝や撹乱により、遺構や覆土上部が破壊されている。
〔構　造〕　平面形状の基本は、隅丸方形である。床面はⅧ～Ⅸ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。主柱穴・壁溝は特に見当たらないが、土坑が1基存在している。
〔カマド〕　煙道部の構造は地下式であり、白色系粘土によってつくられた袖が検出されている。火床面付近に土師器を転用した支脚が2つ残されていたことから、2つ掛けのカマドであったことがわかる。
〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様である。2層に十和田a火山灰が層状に堆積する。
〔炭化物〕　部分的ではあるが、床面上で確認された。4点同定した結果、コナラ属コナラ節が2点、草木が2点という内容であった。住居焼失に関わるものか否かは判断し難い。
〔遺　物〕　土師器・須恵器・石製品・鉄滓が出土した。掲載遺物の出土位置は、8・9・19・22・24・25・26がカマド内、14がカマド煙道部、6・17・20がカマド支脚、10・27がカマド直上面、1・2・3・5・13・16・18・21・23・29・30が床面、7・12が床面直上、4・31が床面直上から覆土中位、それ以外が覆土である。多くがカマド内部とその周辺の床面上に集中しているといって良い。28は、7～8世紀代の断片化した刻書土器である。図示はしていないが床面上から鉄滓も出土している。12は内面にみられる煤の付着具合から灯明皿として使われた可能性がある。最も特筆すべきは、土師器の坏の多さに加え、坏（高台付）・鉢・長胴甕（出羽型）など、他の遺構では稀な遺物が散見される点であろう。以上、カマドおよび床面出土の遺物は、9世紀中葉～後葉のもので占められている。

**第43号住居跡**（図50～52）

〔概　要〕　９世紀中葉～後葉の住居跡。カマドが住居左側に片寄って設置された数少ない事例である。一つ掛けとみられるカマドには、４つの土師器を重ねて作った支脚が残されていた。カマド左脇の床面上からは、本遺跡唯一となる須恵器皿の転用硯が出土した。

〔重　複〕　７世紀後半～８世紀初頭と推定される47号住居跡を破壊して構築されている。更に、住居埋没後に掘り込まれた後世の溝によっても、遺構や覆土上部が部分的に破壊されている。

〔構　造〕　平面形状の基本は、隅丸方形である。北側の床面はⅧ層を直に床としているのに対し、東・西・南側の床面はⅧ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化されている。つまり、貼床の範囲は、カマド周辺を除きＬ字形を呈しており、更に壁溝があるのは斜面下方にあたる南の壁際周辺のみである。主柱穴は特に見当たらないが、小規模な土坑ないしPitが２基存在している。

〔カマド〕　煙道部の構造は地下式である。天井部は既に失われていたが、袖部は白色系粘土によって作られている。火床面には土師器を４つ重ねた支脚が１つ残されていたことから、１つ掛けのカマドであったことがわかる。

〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様である。２層に白頭山火山灰が少量、３層に十和田ａ火山灰が層状に堆積する。

〔遺　物〕　土師器・須恵器が出土した。掲載遺物の出土位置は、１・２・３・５がカマド支脚（上から２・１・５・３の順で重ねられていた）、６がカマド内および床面上、７が床面上、それ以外が覆土である。特筆すべき遺物として、７の須恵器坏（高台付）が挙げられる。いわゆる転用硯としては、青森県内でも古い段階のものであろう。なお、断片化の進んだ土器片は覆土全般に見受けられた。以上、カマドおよび床面出土の遺物は、９世紀中葉～後葉のもので占められている。

**第44号住居跡**（図53～56）

〔概　要〕　９世紀中葉～後葉の住居跡。カマドと反対側の壁にトンネル状の掘り込みが設けられている。掲載遺物は少ないものの、出羽型の土師器長胴甕や鉄錆の付着した砥石が出土した。

〔重　複〕　住居埋没後に掘り込まれた後世の溝により、遺構や覆土上部が破壊されている。

〔構　造〕　平面形状の基本は、隅丸方形である。床面はⅧ～Ⅸ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。主柱穴・壁溝は不明瞭であるが、Pitないし土坑が３基存在する。カマドと反対側の壁には、奥行50cmほどのトンネル状の掘り込みが設けられている。

〔カマド〕　煙道部の構造は地下式である。天井部は既に失われていたが、袖部は白色系粘土によって作られている。支脚は存在しない。

〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様である。１層に十和田ａ火山灰が層状に堆積する。

〔遺　物〕　土師器・須恵器・土製品・石器が出土した。掲載遺物の出土位置は、２・８がカマド内、５がカマド右脇、１・３・６・７・10・13が床面、12が床面直上、それ以外が覆土である。このうち、５（出羽型長胴甕）はカマド右脇の床面上と壁面に添うようにして出土した。なお、断片化の進んだ土器片は覆土全般に見受けられた。以上、カマドおよび床面出土の遺物は、９世紀中葉～後葉のもので占められている。

**第45号住居跡**（図57～59）

〔概　要〕　9世紀中葉～後葉の住居跡。掲載遺物は少ないものの、土師器の高台坏・出羽型（北陸型）長胴甕・墨書土器などが散見される。後の流れ込みと考えられるが、7～8世紀代とみられる異形土製品ないし土器が出土している。

〔構　造〕　平面形状の基本は、隅丸方形である。床面はⅦ～Ⅷ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。主柱穴・壁溝は不明瞭であるが、Pitないし土坑が1基存在する。

〔カマド〕　煙道部の構造は地下式である。若干残っていた天井部と袖部は、白色系粘土によって作られている。支脚は明確ではないが、それらしき軽石の加工品が16層から出土している。

〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様である。1層に白頭山火山灰が少量、3層に十和田a火山灰が層状に堆積する。

〔遺　物〕　土師器（土製品の疑いがあるものを含む）・須恵器・石製品が出土した。掲載遺物の出土位置は、8がカマド内、2・3・9が床面、1・4・7が床面直上、それ以外が覆土である。2は数少ない墨書土器の一つである。特筆すべきは、10の異形土製品もしくは土器であろう。ほとんど類例が無いため詳細不明だが、質感・特徴からは7～8世紀代に製作されたものと思われる。本住居跡の埋没過程において流れ込んだのであろうか。なお、断片化の進んだ土器片は覆土全般に見受けられた。以上、カマドおよび床面出土の遺物は、9世紀中葉～後葉のもので占められている。

**第46号住居跡**（図60）

〔概　要〕　1辺の長さが2m前後の小規模な建物跡。重複関係および本遺構に伴う明確な遺物が無いため、具体的な時期は不明。しかし、カマドの特徴から平安期の可能性が高く、周辺の遺構年代からすると、9世紀中葉～後葉の構築・廃絶も考えられる。

〔構　造〕　平面形状の基本は、隅丸方形である。床面はⅧ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。主柱穴・壁溝は見当たらない。

〔カマド〕　煙道部の構造は地下式である。煙道部は約1.1mあり、先端にかけて底面が傾斜する。若干残っていた天井部と袖部は白色系粘土によって作られている。支脚は残存していなかった。

〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様である。特筆すべき降下火山灰は見当たらない。

〔遺　物〕　覆土中から断片化した土師器が幾つか出土したのみである。掲載遺物は無い。

**第47号住居跡**（図61～62）

〔概　要〕　カマドは煙道部が極端に短い半地下式の構造である。本遺構に伴う明確な遺物が無いため、本遺構の具体的な時期は不明であるが、重複関係から9世紀中葉～後葉以前の構築・廃絶は確実である。カマドの特徴や出土土器からすると、7世紀後半～8世紀初頭頃の住居跡であろうか。

〔重　複〕　住居埋没後、9世紀中葉～後葉とみられる43号住居跡が構築されたことにより、遺構の半分近くが破壊されている。更に、住居埋没後に掘り込まれた後世の溝によっても、遺構や覆土上部が部分的に破壊されている。

〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形と推定されるが、遺構の半分近くが破壊されているため、定かではない。床面はⅧ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。主柱穴・壁溝は見当たらな

いが、住居中程に土坑が存在する。

〔カマド〕　煙道部は半地下式となっており、住居外に僅かに延びる程度である。袖部に関しては、住居壁際はⅧ層を削り出した後、表面ないし上部に白色系粘土を貼り付けているのに対し、焚口付近は地山を削り出すことなく、白色系粘土のみで構築されている。なお、天井部は既に失われており、火床面も定かではなかった。支脚も見当たらない。

〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様であるが、１層中に黄褐色土（Ⅶ～Ⅷ層）を主体とする人為堆積層が部分的に形成されている（但し、土層断面図には反映されない位置）。特筆すべき降下火山灰は見当たらない。

〔遺　物〕　１・２層中から断片化した土師器が一定量出土した。これらは、７世紀末～８世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の資料が主体であり、掲載遺物として３点を取り上げた。但し、床面・カマド・土坑に伴う明確な遺物は認め難い。

**第48号住居跡**（図62）

〔概　要〕　大半が調査区域外に及んでいることに加え、本遺構に伴う明確な遺物・火山灰が無く、他の遺構との重複関係も確認されないため、具体的時期は不明。

〔重　複〕　住居埋没後に掘り込まれた後世の溝により、遺構ならびに覆土が破壊されている。

〔構　造〕　平面の基本形は隅丸方形と目されるが、一部が調査区域外にあるため、定かではない。床面はⅤ・Ⅶ層まで掘り込まれた後、貼床によって平坦化される。主柱穴・壁溝は特に見当たらない。

〔カマド〕　調査区外に存在する可能性がある。

〔堆積土〕　主に自然堆積を経て埋没した模様である。特筆すべき降下火山灰は見当たらない。

〔遺　物〕　覆土中から非常に断片化した土師器が幾つか出土したのみである。掲載遺物は無い。

ｂ．掘立柱建物跡

Pit自体は調査区の所々で確認されているが、古代と断定できるものは建物跡１棟のみである。他に可能性のあるものが１棟あるが、それは３節に第９号掘立柱建物跡として報告している。個別の遺構について述べる前に、主な留意点に触れる。

〔遺構番号〕　本遺跡の掘立柱建物跡は、これまでに７号まで報告されているため、今回は８号からとする。参考までに、以前に報告された７棟は、古代以外のものが含まれている可能性があるため、注意が要る。

**第８号掘立柱建物跡**（図63）

〔概　要〕　２×２間と推定される建物跡。火山灰および遺構の重複関係より、古代に属すことが確実視される。但し、本遺構に伴う明確な遺物が無いため、具体的時期は不明。

〔重　複〕　十和田ａ降下以前に構築された第２号円形周溝によって、部分的に破壊されている。更に、十和田ａ降下以後に設けられた畝状遺構による破壊も受けている。

〔構　造〕　調査区際に存在しているため厳密ではないが、確認された範囲からは２×２間の方形の建物跡と推定される。斜面上方となる北側にのみ溝状の掘り込みを伴う。

〔堆積土〕　各PitはⅧ層を底面としており、覆土は黒色土を主体とする。柱痕等は特に確認されない。遺構内に特筆すべき降下火山灰は見当たらないが、遺構上部に十和田 a 火山灰が面に近い状況で認められた。
〔遺　物〕　明確なものは認められない。

c．円形周溝

隣接して大小２基が確認された。興味深いことに、大きい方が小さい方のほぼ倍の規模となる。調査時、双方の主体部確認に力を注いだが、それらしい痕跡は認めることができなかった。加えて、双方とも遺構の年代を具体的に示す遺物を欠くため、詳細な時期は不明である。しかし、互いの位置関係ならびに規模を考えると、両者の関連性は高かった様子が窺える。

なお、円形周溝は、今回が初めての報告となる。個別の内容について述べる前に、主な留意点を以下に記す。
〔遺構番号〕　調査時と報告時で遺構の名称を変更した。すなわち、ESD－01を第１号円形周溝に、ESD－02を第２号円形周溝としており、これが遺物の注記等にも反映されている。

**第１号円形周溝**（図64～65）
〔概　要〕　第２号円形周溝との関連性を考えると十和田 a 火山灰降下以前と推測される。本遺構の年代を具体的に示す遺物を欠くため、詳細な時期は不明である。
〔構　造〕　平面の基本形は円形である。直径は約6.5ｍを測る。底面はⅤ・Ⅷ層まで掘り込まれた後、平坦化されている。内部には、白頭山火山灰と焼土の被熱範囲に加え、柱穴１基を確認しているが、本遺構との関係を明らかにできない。
〔堆積土〕　溝内は黒色土を主体とする自然堆積を経て埋没した模様である。特筆すべき降下火山灰は見当たらない。なお、溝に囲まれた内部は、墳丘などの高まりや人為的な土壌堆積等は一切認められず、基本層序と同じ土層変化だったことを明記しておく。
〔遺　物〕　溝の中および溝に囲まれた内部より、土師器・石製品が出土した。土師器は、ほぼ７世紀末～８世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）のもので占められているが、数点、９世紀代と思われるロクロ技法のものが確認できる。概ね２×２cmもしくは３×３cm程度にまで断片化しており、破片数の割には掲載すべきものが見当たらない。掲載遺物の出土地点は、４・６が溝の覆土中、２・３・５・９が溝に囲まれた内部の基本層序第Ⅲ層中（これらは包含層の遺物であることから、遺構に伴わない可能性もある）、１・７ａ・７ｂが溝の内外で出土し、各々接合している。

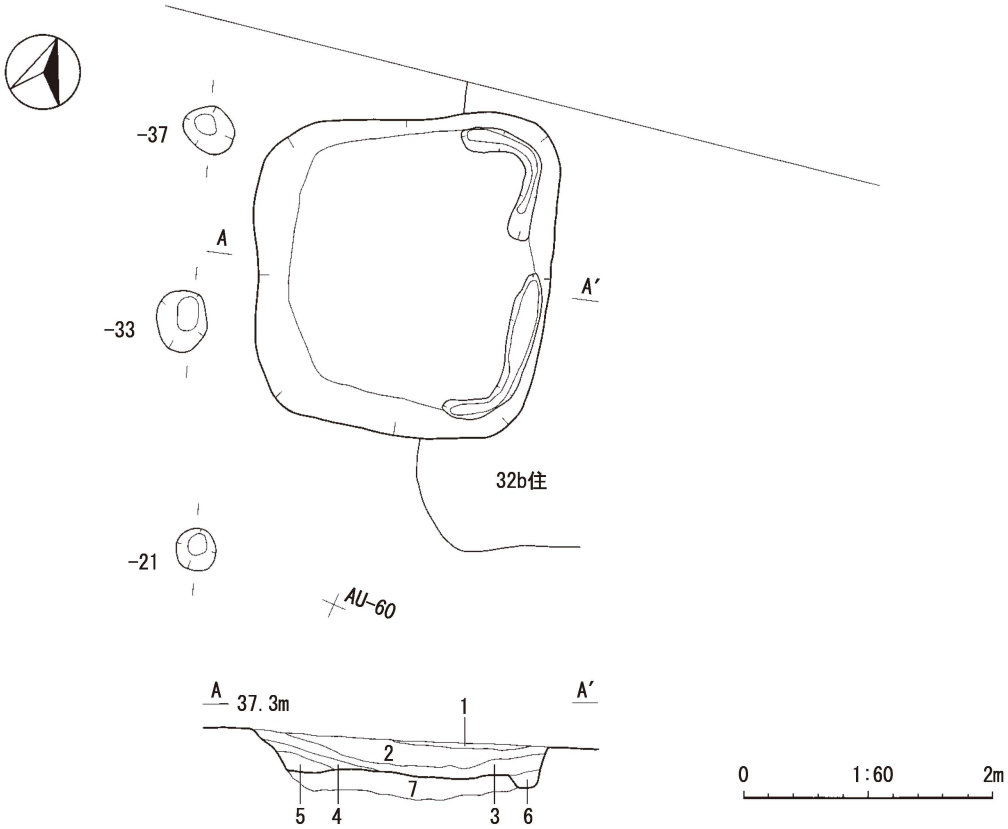
**第２号円形周溝**（図66）
〔概　要〕　８号掘立柱建物跡の構築・廃絶以後～十和田 a 火山灰降下以前に設けられた遺構である。但し、本遺構の年代を具体的に示す遺物を欠くため、詳細な時期は不明である。
〔重　複〕　７号掘立柱建物跡を破壊して構築されている。また、十和田 a 降下以後に設けられた畝状遺構によって破壊されている。

〔構　造〕　平面の基本形は円形である。直径は約3.4ｍを測り、底面はⅤ・Ⅶ層まで掘り込まれる。
〔堆積土〕　溝内は黒色土を主体とする自然堆積を経て埋没した模様である。遺構内に特筆すべき降下火山灰は見当たらないが、遺構上部に十和田ａ火山灰が面に近い状況で認められた。なお、溝に囲まれた内部には、墳丘などの高まりや人為的な土壌堆積等は一切確認できず、基本層序と同じ土層変化だったことを明記する。
〔遺　物〕　溝の覆土中から７世紀末～８世紀初頭頃（宇部Ⅲ群）の土師器片十数点と石鏃１点が出土した。土師器は、概ね２×２cmもしくは３×３cm程度にまで断片化している。掲載した１点は、高坏の脚部である。

ｄ．土　坑

２基確認された。個別の遺構について述べる前に、主な留意点を以下に記す。
〔遺構番号〕　調査時と報告時で遺構の名称を変更した。すなわち、SX−02を７号土坑としており、これが遺物の注記等にも反映されている。

**第５号土坑**（図66）
〔概　要〕　９世紀中葉～後葉の土器片が一定量出土する遺構。底面が被熱しており、炭化物も確認されている。上屋構造として第９号掘立柱建物跡が伴う可能性もある。
〔構　造〕　平面の基本形は円形である。底面はⅢ～Ⅴ層まで掘り込まれている。
〔被熱範囲〕　底面上の広範囲に確認される。直上には炭化物が散在する。
〔堆積土〕　黒色土を主体とする自然堆積を経て埋没した模様である。２層に十和田ａ火山灰が層状に堆積する。
〔遺　物〕　底面上から断片化した土師器が出土した。掲載遺物は９世紀中葉～後葉に属す。




**第32a号住居跡**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | To-a7%混入、10YR8/8黄橙色土(φ1～3mm)2%混入 |
| 2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR7/6明黄褐色土(φ1～50mm)7%、炭化物粒1%混入 |
| 3層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR6/8明黄褐色土10%混入 |
| 4層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR6/8明黄褐色土20%混入 |
| 5層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR6/8明黄褐色土30%混入 |
| 6層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR6/8明黄褐色土3%混入(壁溝) |
| 7層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | 10YR2/1黒色土50%混入(貼床) |

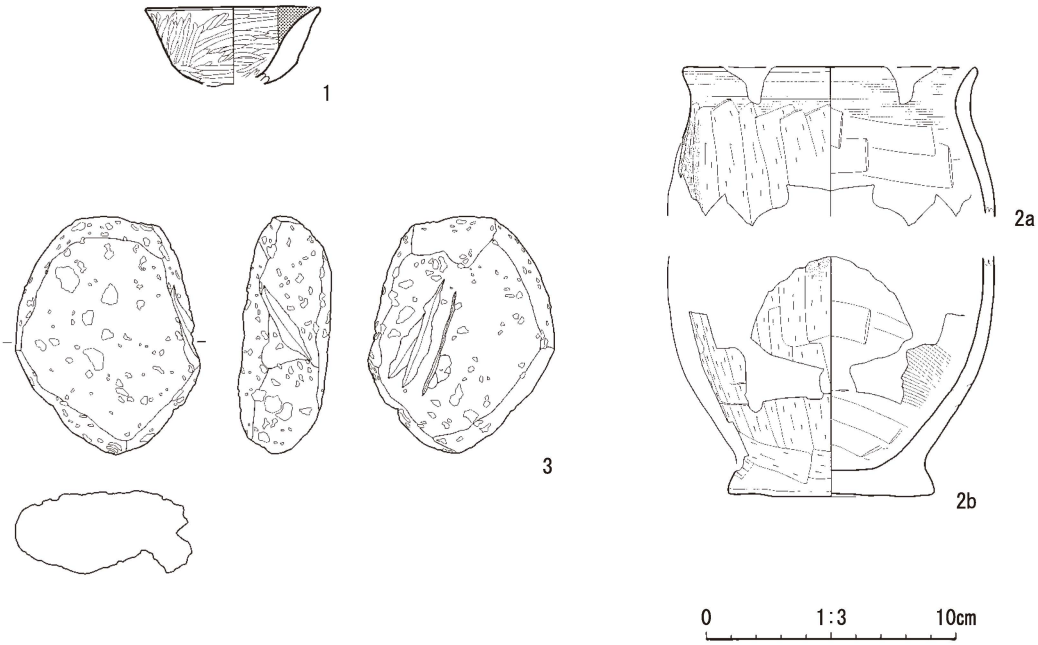



図12　第32a号住居跡

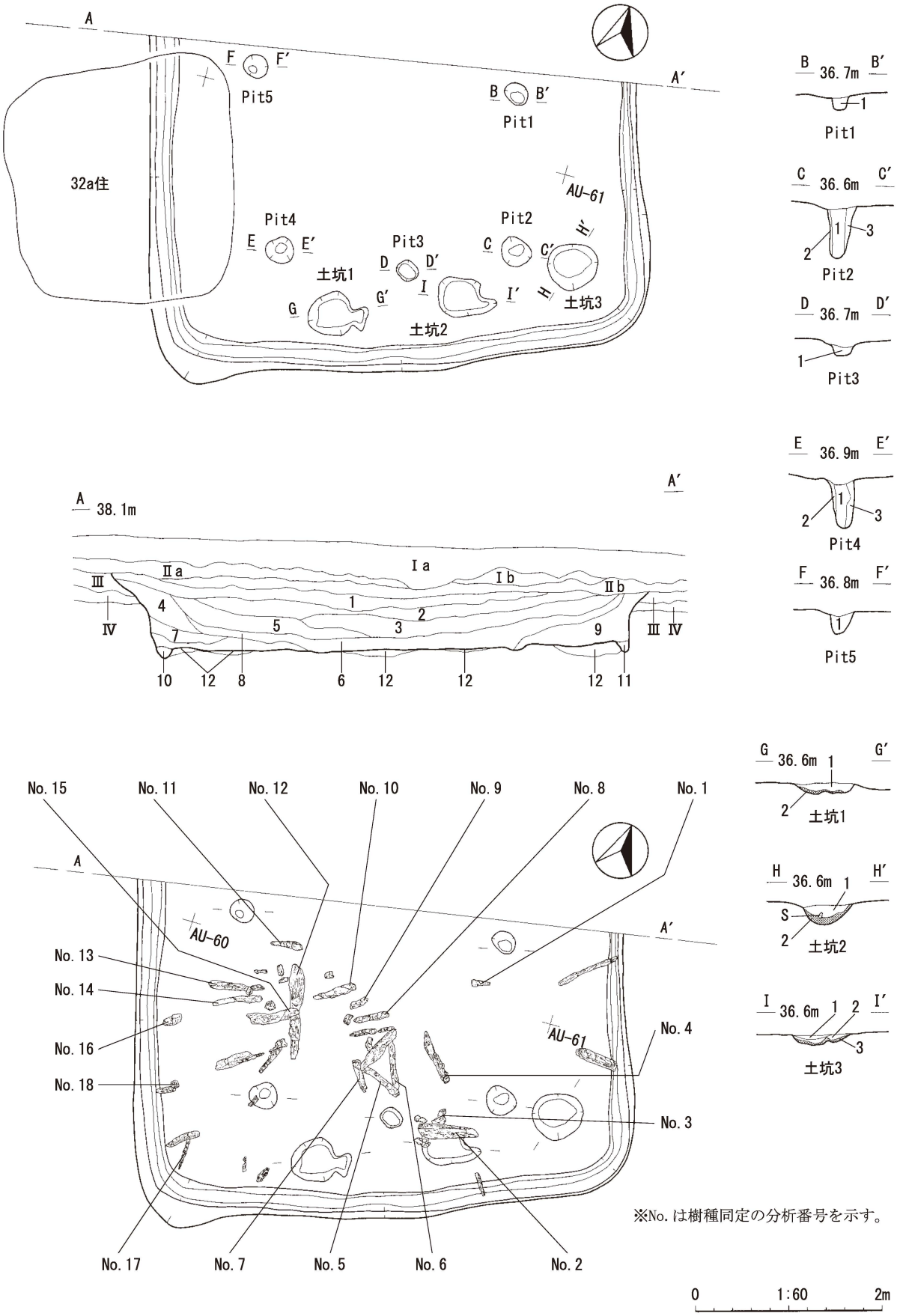



図13　第32b号住居跡①

**第32b号住居跡**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR7/8黄橙色土(φ1～5mm)7%混入 |
| 2層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR2/3黒褐色土、10YR6/8明黄褐色浮石(φ1～20mm)10%混入 |
| 3層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR7/6明黄褐色土(φ1～50mm)15%、10YR1.7/1黒色土2%、炭化物混入 |
| 4層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR4/6褐色土(φ1～2mm)1%混入 |
| 5層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR6/8明黄褐色土(φ1～70mm)7%混入 |
| 6層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色浮石(φ1～3mm)5%、炭化物混入 |
| 7層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 7.5YR4/4褐色焼土、10YR5/6黄褐色土1%混入 |
| 8層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 7.5YR4/6褐色焼土、10YR6/6明黄褐色土(φ1～30mm)7%混入 |
| 9層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色浮石(φ1～50mm)10%、炭化物混入 |
| 10層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR5/8黄褐色土50%混入(壁溝) |
| 11層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR5/8黄褐色土50%混入(壁溝) |
| 12層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | 10YR2/1黒色土50%混入(貼床) |

**第32b号住居跡Pit１**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | 10YR2/2黒褐色土混入 |

**第32b号住居跡Pit２**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～3mm)少量混入(柱痕) |
| 2層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | |
| 3層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | 10YR1.7/1黒色土混入 |

**第32b号住居跡Pit３**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR2/2黒褐色土、10YR5/8黄褐色土(φ1～10mm)少量混入 |

**第32b号住居跡Pit４**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～10mm)中量混入(柱痕) |
| 2層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | |
| 3層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | 10YR1.7/1黒色土混入 |

**第32b号住居跡Pit５**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR2/2黒褐色土、10YR5/8黄褐色土(φ1～5mm)少量混入 |

**第32b号住居跡１号土坑**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土50%混入 |
| 2層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色粘土 | |

**第32b号住居跡２号土坑**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 10YR5/8黄褐色土50%混入 |
| 2層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色粘土 | |

**第32b号住居跡３号土坑**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土50%混入 |
| 2層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 | 10YR5/4にぶい黄褐色粘土 |
| 3層 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色粘土 | |

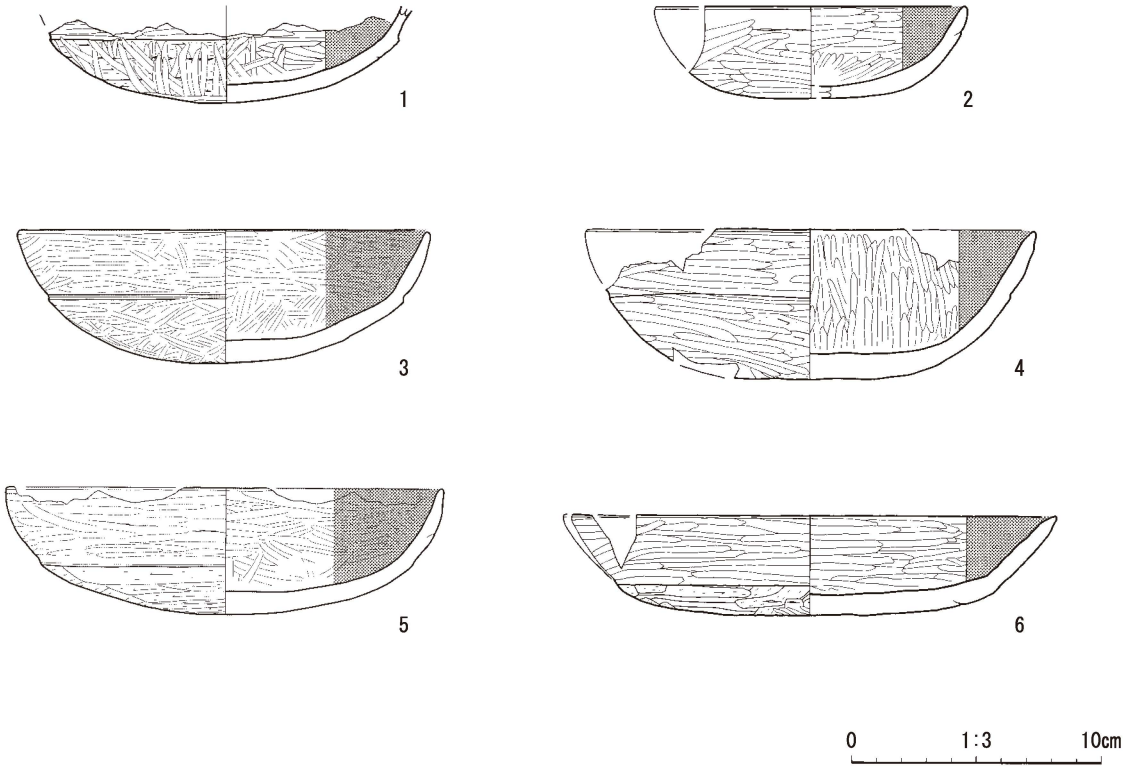



図14　第32b号住居跡②

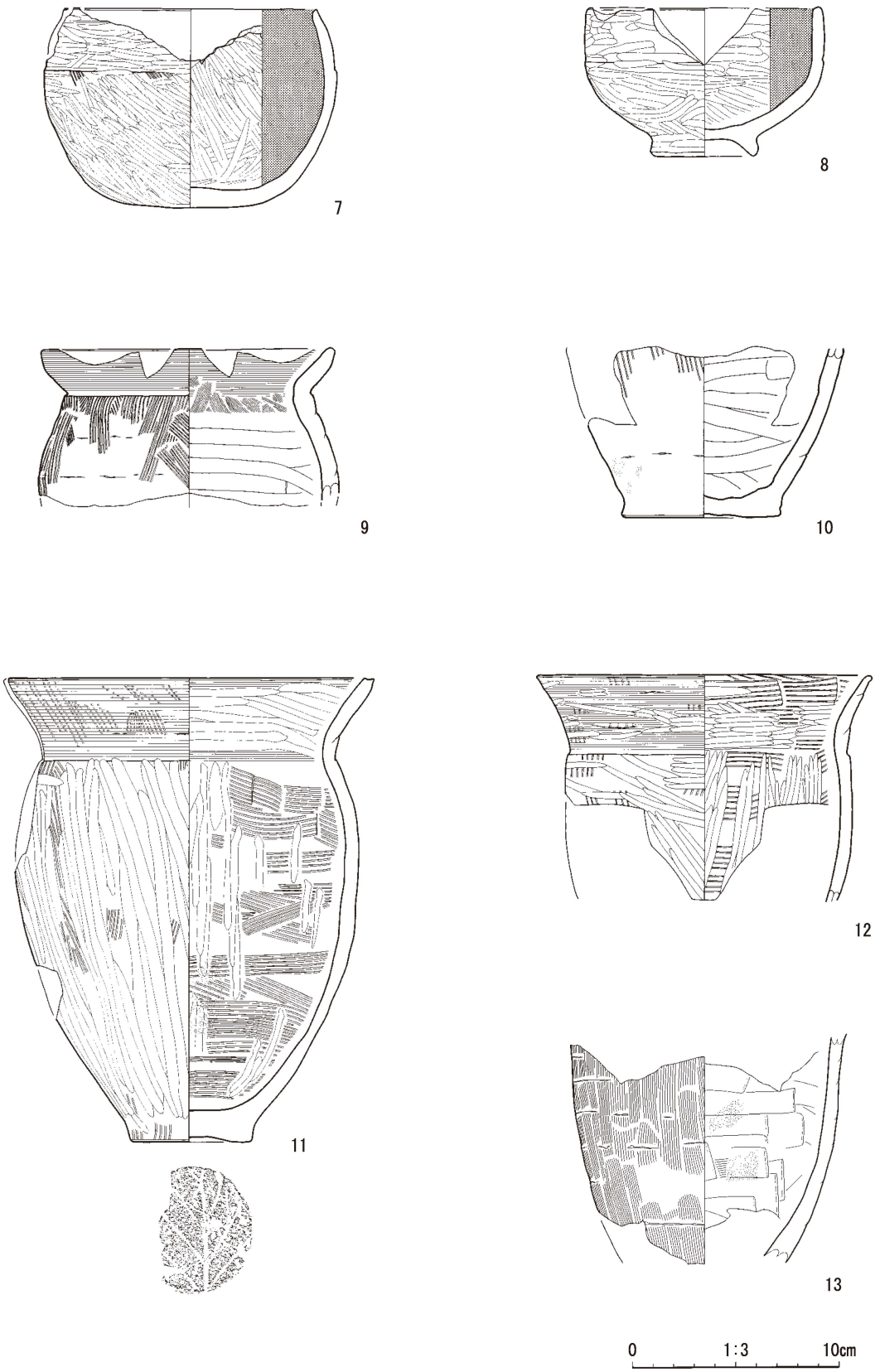
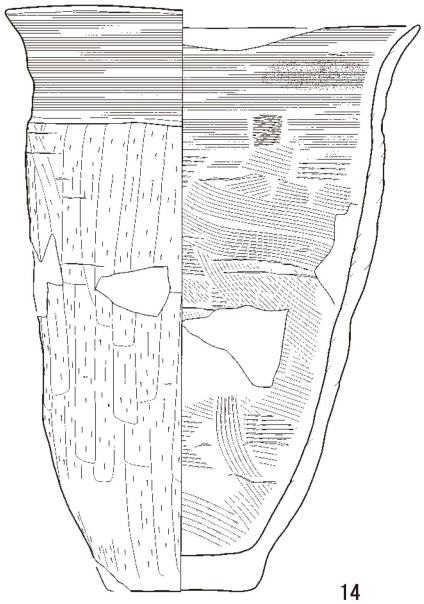
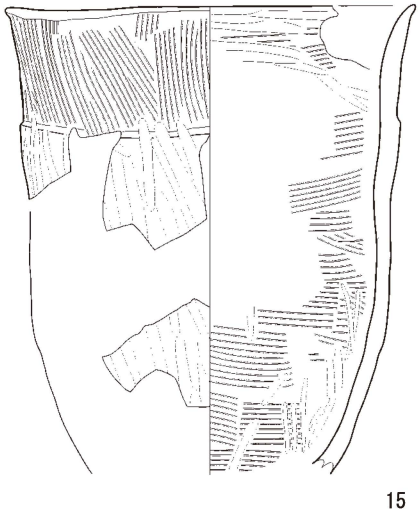
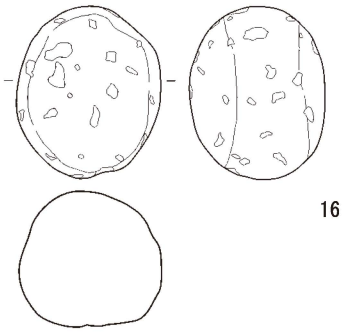
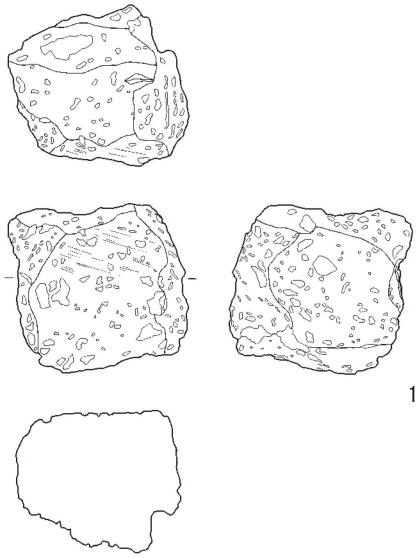


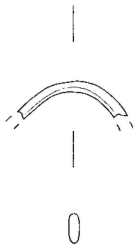

図15　第32b号住居跡③






0 1:3 10cm

0 1:1 5cm

(19のみ)

図16　第32b号住居跡④

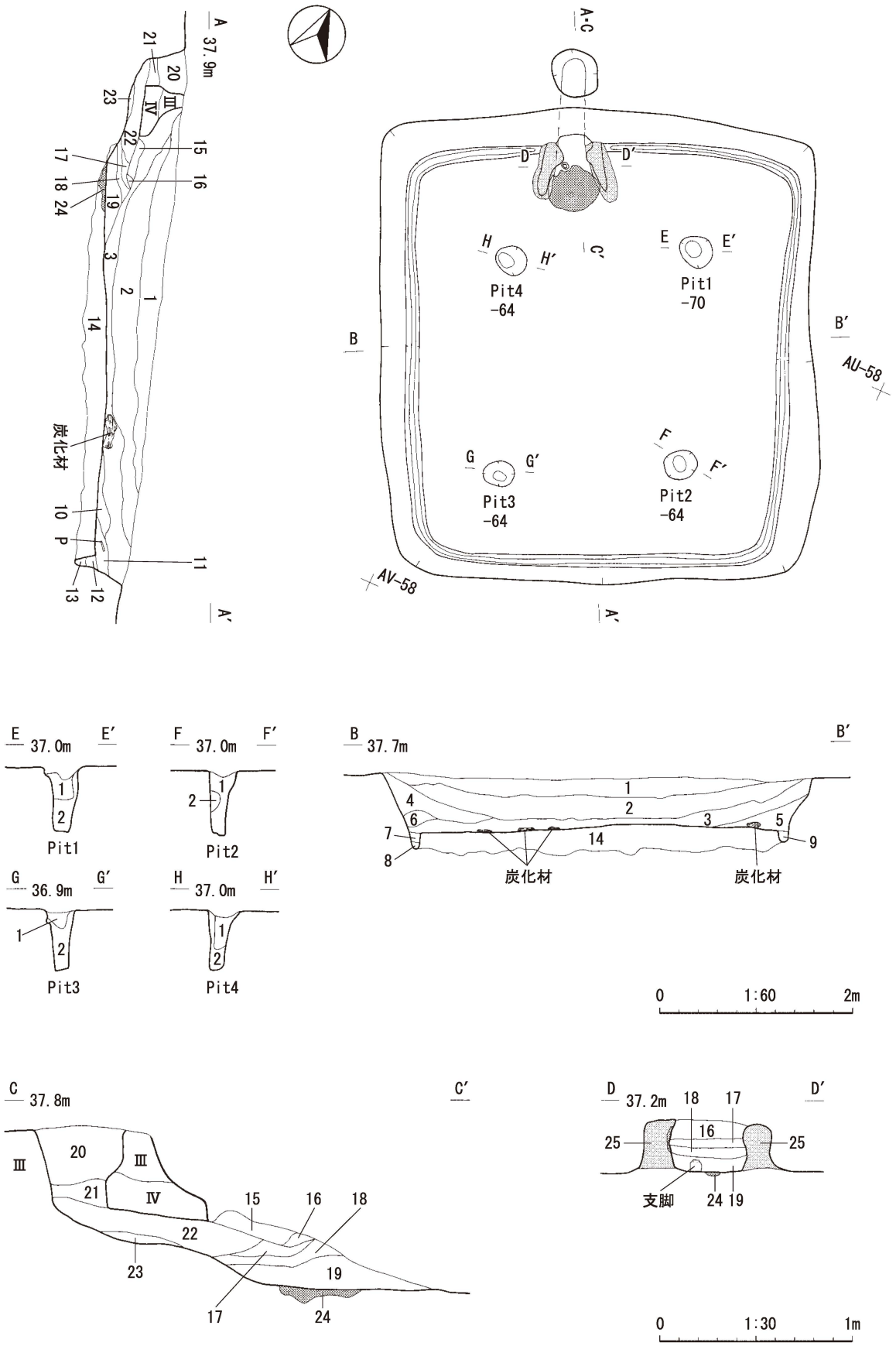
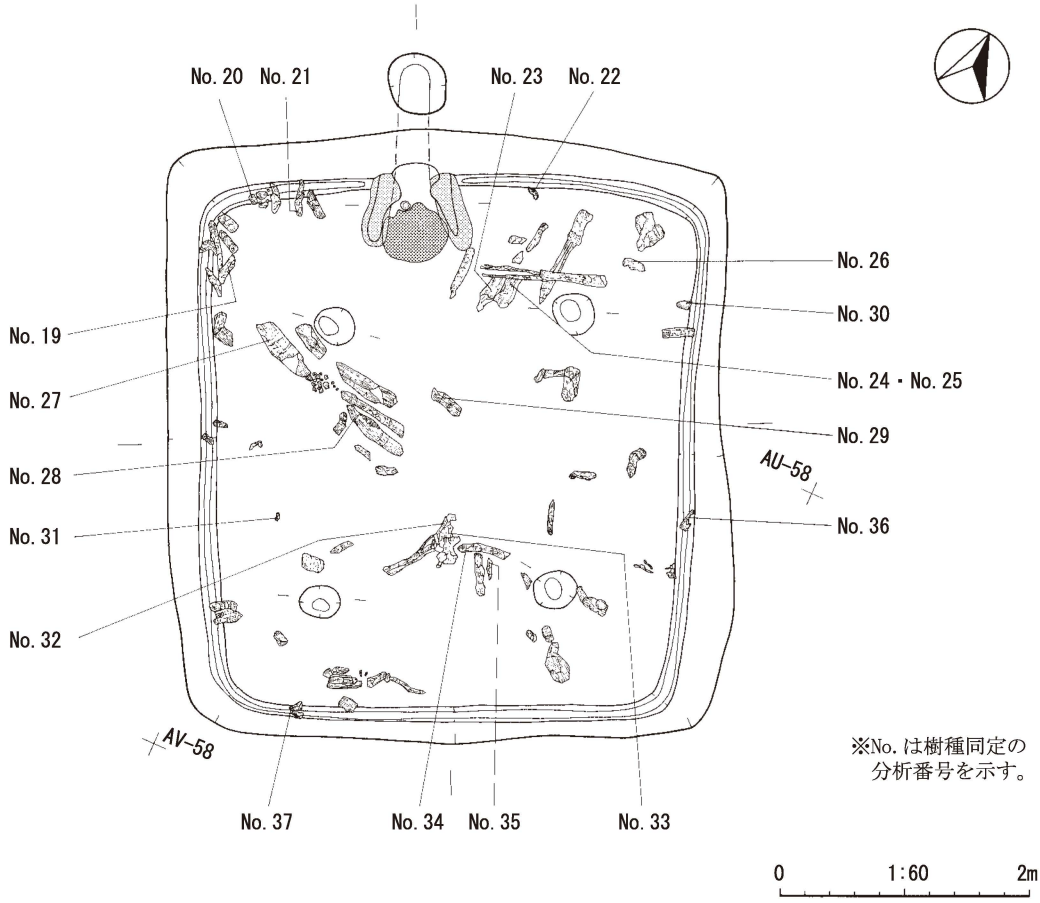



図17　第33号住居跡①




**第33号住居跡**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR7/8黄橙色土(φ1～3mm)10%、10YR5/8黄褐色土7%、炭化物粒3%混入 |
| 2層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR4/6褐色土40%、10YR2/3黒褐色土30%、10YR8/8黄橙色土(φ1～3mm)、炭化物2%混入 |
| 3層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR2/2黒褐色土30%、10YR4/6褐色土10%、炭化物10%、10YR5/8黄褐色土(φ1～1mm)5%混入 |
| 4層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR3/3暗褐色土10%、10YR6/8明黄褐色土(φ1～3mm)3%、炭化物粒1%混入 |
| 5層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1mm)10%、10YR3/3暗褐色土7%、炭化物粒3%混入 |
| 6層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR3/4暗褐色土10%、10YR5/8黄褐色土(φ1～2mm)5%、炭化物3%混入 |
| 7層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 | 10YR6/8明黄褐色土(φ1～2mm)20%、10YR5/8黄褐色土(φ1～30mm)少量、炭化物2%混入 |
| 8層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR2/2黒褐色土50%、10YR6/8明黄褐色土20%混入 |
| 9層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 10YR5/6黄褐色土20%混入 |
| 10層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR2/1黒褐色土10%、10YR5/8黄褐色土(φ1～20mm)7%、炭化物2%混入 |
| 11層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR8/8黄橙色土(φ1mm)10%、10YR4/6褐色土混入 |
| 12層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR6/8明黄褐色土20%混入 |
| 13層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 | |
| 14層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR5/8黄褐色土50%混入 |
| 15層 | 10YR4/2 | 灰黄褐色粘土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～10mm)1%混入 |
| 16層 | 10YR3/1 | 黒褐色土 | 10YR4/2灰黄褐色粘土塊(φ1～50mm)5%、7.5YR4/6褐色焼成粘土塊(φ1～30mm)1%混入 |
| 17層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 灰黄褐色粘土塊(φ1～50mm)10%混入 |
| 18層 | 10YR4/2 | 灰黄褐色粘土 | |
| 19層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 7.5YR4/6褐色焼成粘土塊(φ1～20mm)1%、灰黄褐色粘土粒中量、焼土粒1%混入 |
| 20層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 10YR4/2灰黄褐色粘土塊(φ1～20mm)10%混入 |
| 21層 | 10YR3/3 | 黒褐色土 | |
| 22層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 | 白色粘土中量、焼土塊1%混入 |
| 23層 | 10YR5/8 | 黄褐色ローム | 10YR1.7/1黒色土50%混入 |
| 24層 | 5YR5/8 | 明赤褐色焼土 | (火床面) |
| 25層 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色粘土 | (袖部) |

**第33号住居跡Pit１**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～5mm)1%混入(柱痕) |
| 2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～50mm)5%混入 |

**第33号住居跡Pit２**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～5mm)1%混入 |
| 2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～30mm)10%混入 |

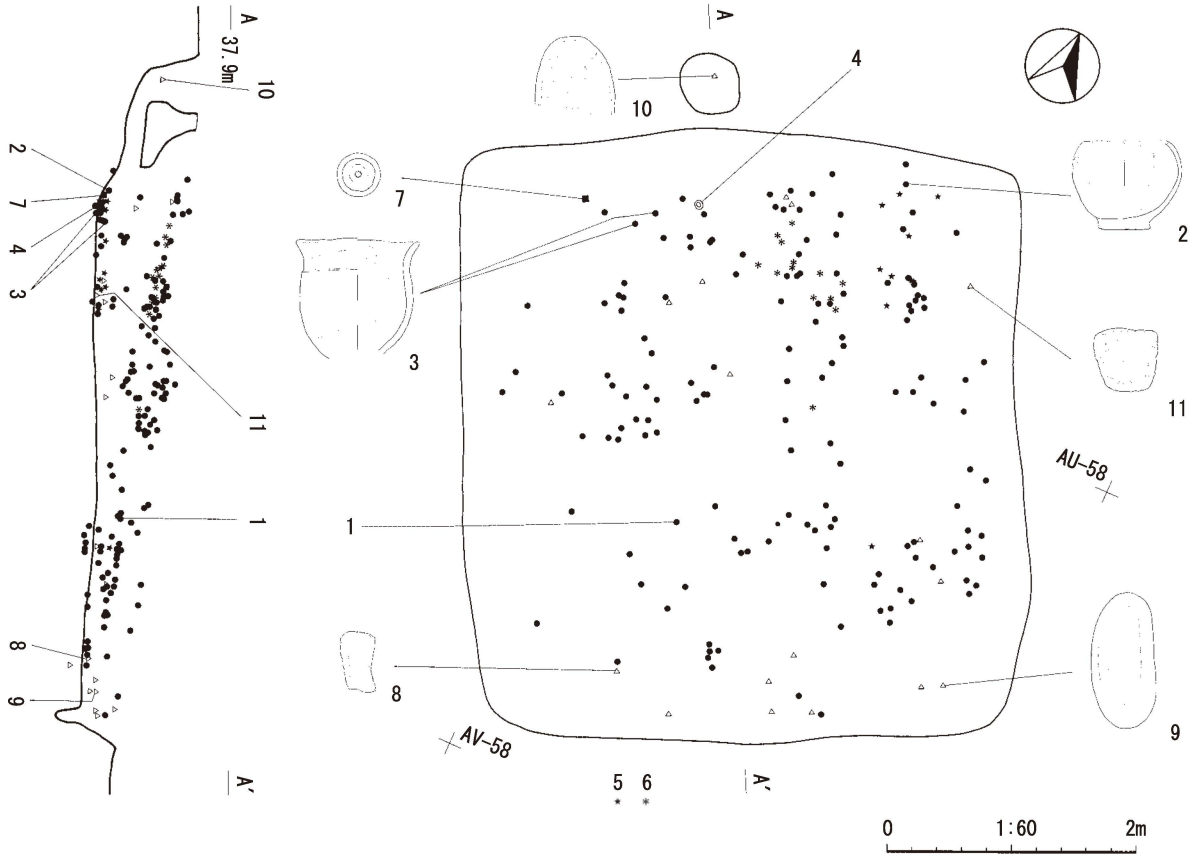
**第33号住居跡Pit３**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土1%混入 |
| 2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～10mm)1%混入 |

**第33号住居跡Pit４**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～3mm)1%混入 |
| 2層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～30mm)10%混入 |

**図18　第33号住居跡②**



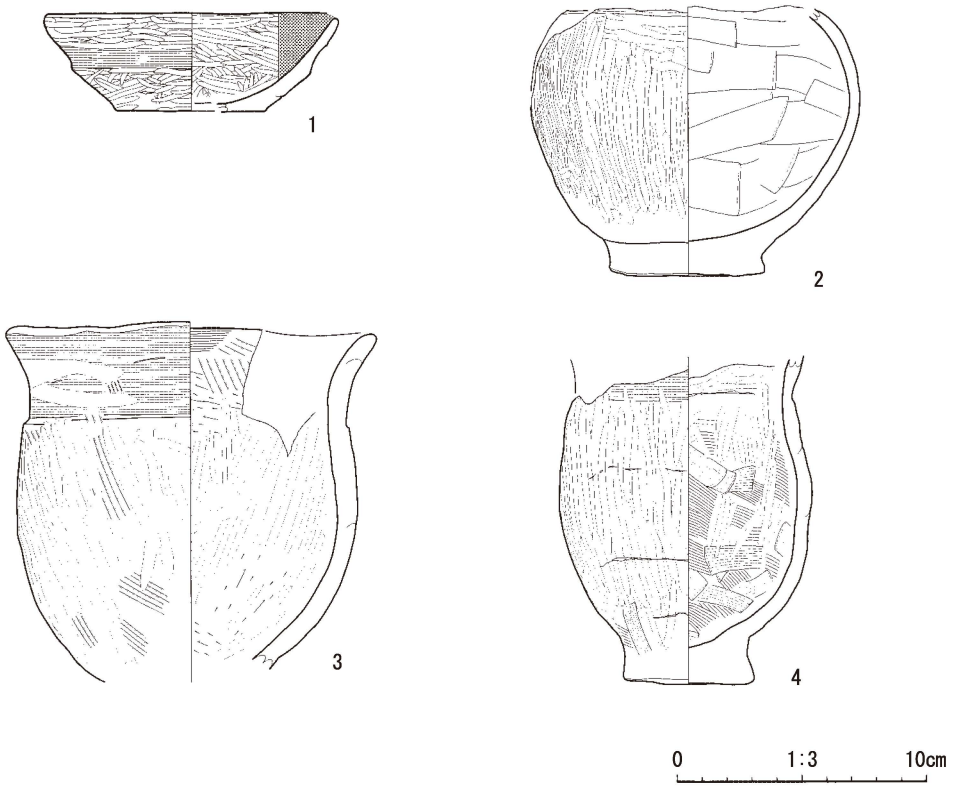
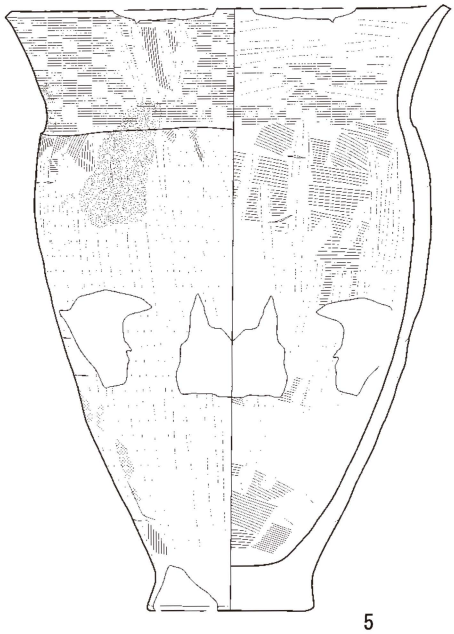
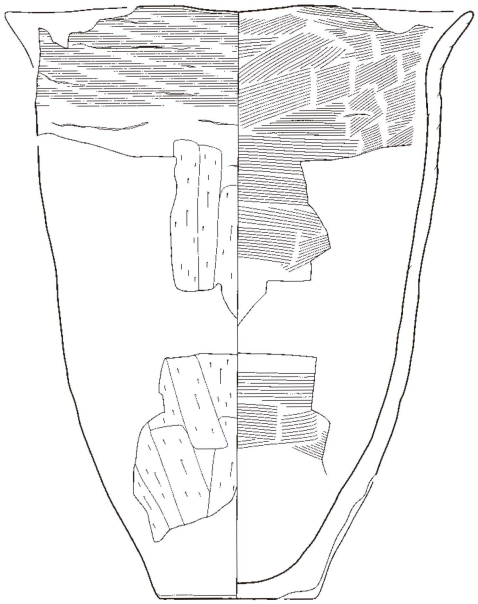
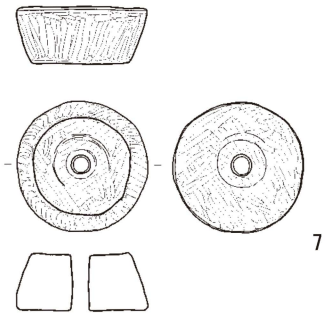
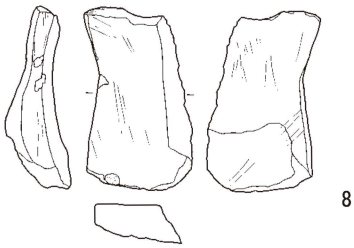



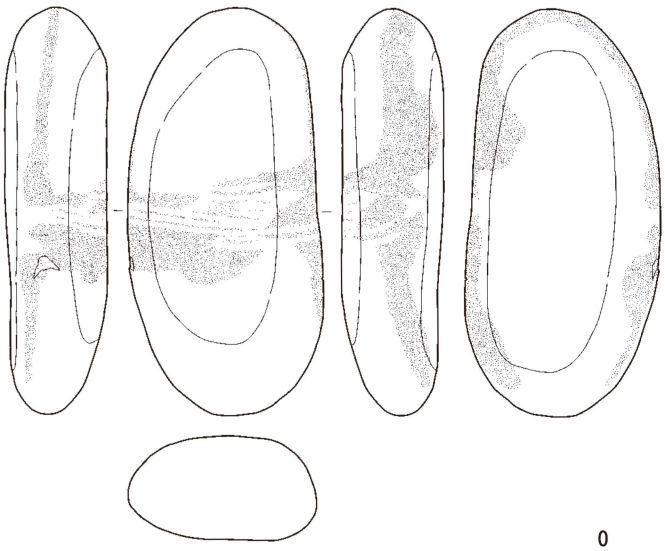

図19　第33号住居跡③




0　1:3　10cm

図20　第33号住居跡④

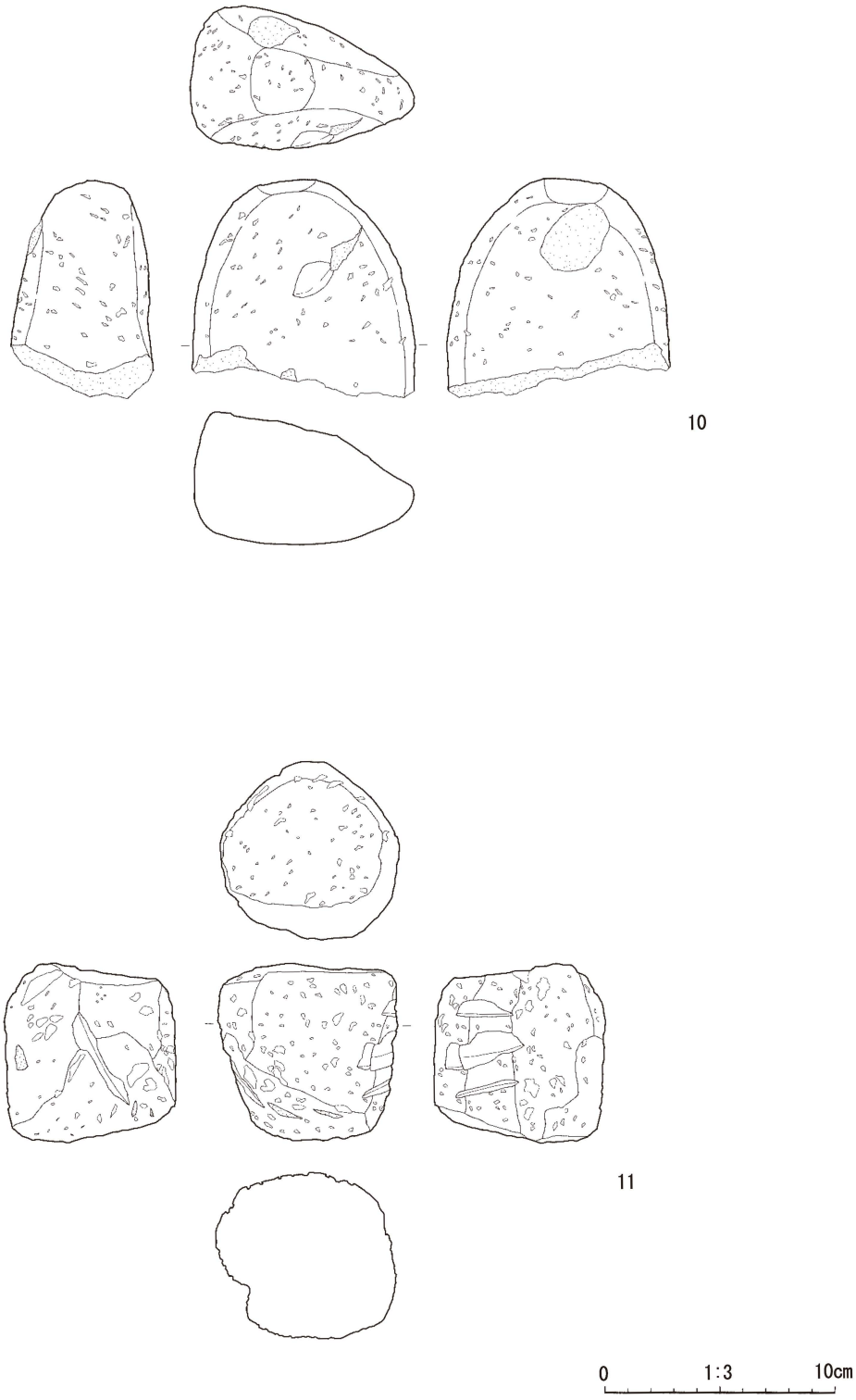
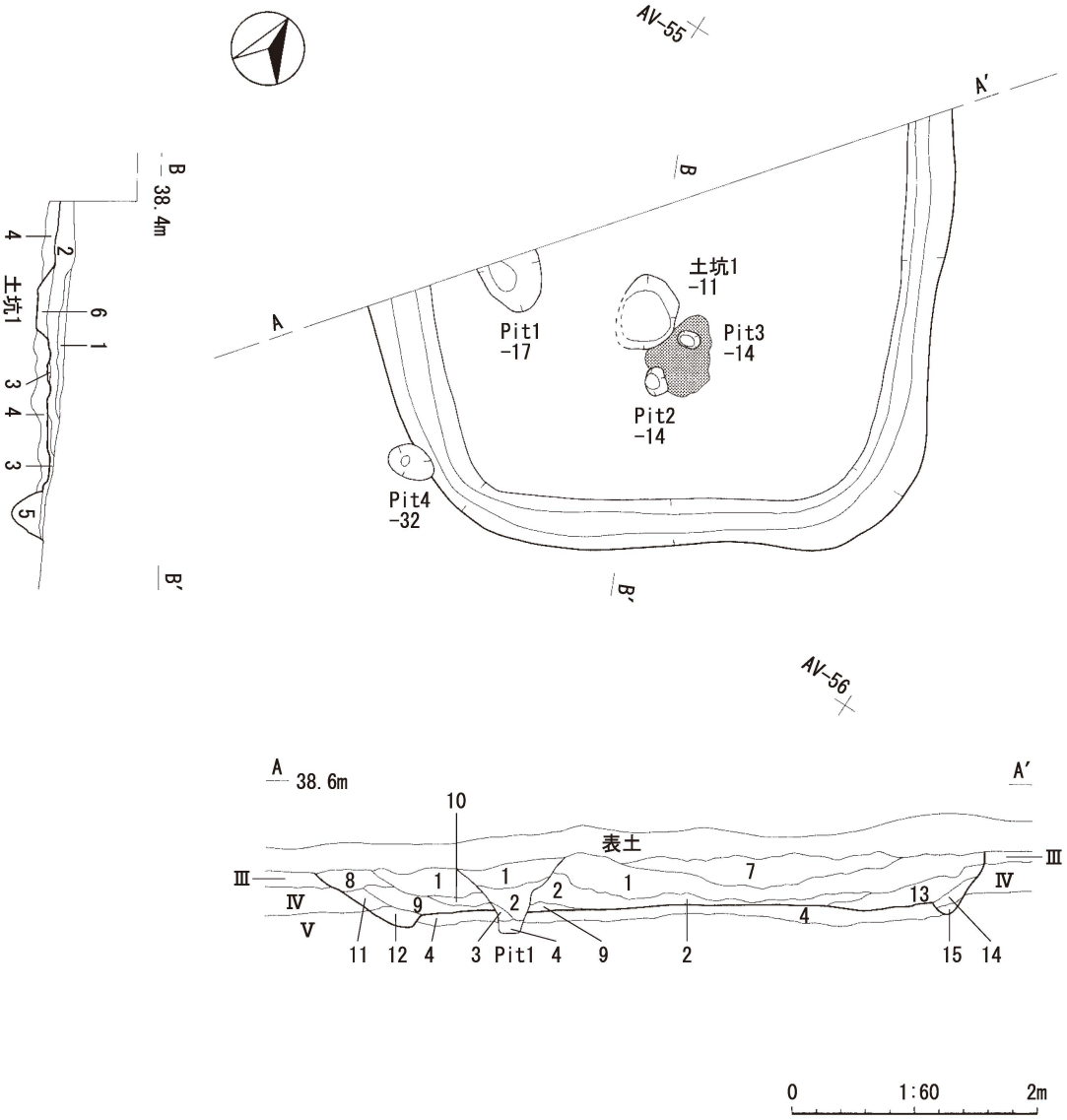



図21　第33号住居跡⑤




**第34号住居跡**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR3/4暗褐色土10%、10YR7/6明黄褐色土(φ1mm)7%混入 |
| 2層 | 10YR4/6 | 褐色土 | 10YR2/1黒色土20%、10YR7/6明黄褐色土(φ1～3mm)10%混入(人為堆積) |
| 3層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 10YR7/6明黄褐色土(φ1mm)20%混入 |
| 4層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 10YR7/6明黄褐色土(φ1mm)40%、10YR3/4暗褐色土5%混入 |
| 5層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR2/3黒褐色土10%、10YR7/6明黄褐色土(φ1mm)10%混入(壁溝) |
| 6層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR2/3黒褐色土50%、中撥浮石粒7%、10YR3/4暗褐色粒3%混入 |
| 7層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR6/8明黄褐色土(φ1～3mm)5%混入 |
| 8層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～2mm)2%混入 |
| 9層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR3/4暗褐色土10%、10YR5/8黄褐色土(φ1mm)7%混入 |
| 10層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR4/6褐色土(φ1mm)10%混入 |
| 11層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR6/6明黄褐色土(φ1mm)30%混入 |
| 12層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 10YR2/1黒色土30%、10YR6/6明黄褐色土(φ1mm)10%混入(壁溝) |
| 13層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR5/8黄褐色土(φ1～2mm)10%、2.5YR5/8明赤褐色焼土3%、B-Tm2%、10YR5/4にぶい黄褐色粘土粒2%、炭化物1%混入 |
| 14層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR7/8黄橙色土(φ1mm)7%混入 |
| 15層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR2/3黒褐色土、10YR7/8黄橙色土(φ1mm)3%混入 |

**Pit1**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR6/8明黄褐色土(φ1mm)2%混入 |
| 2層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR3/4暗褐色土10%、10YR7/8黄橙色土(φ1mm)7%混入 |
| 3層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 10YR7/8黄橙色土(φ1mm)5%混入 |
| 4層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR7/8黄橙色土(φ1mm)3%混入 |

図22　第34号住居跡①

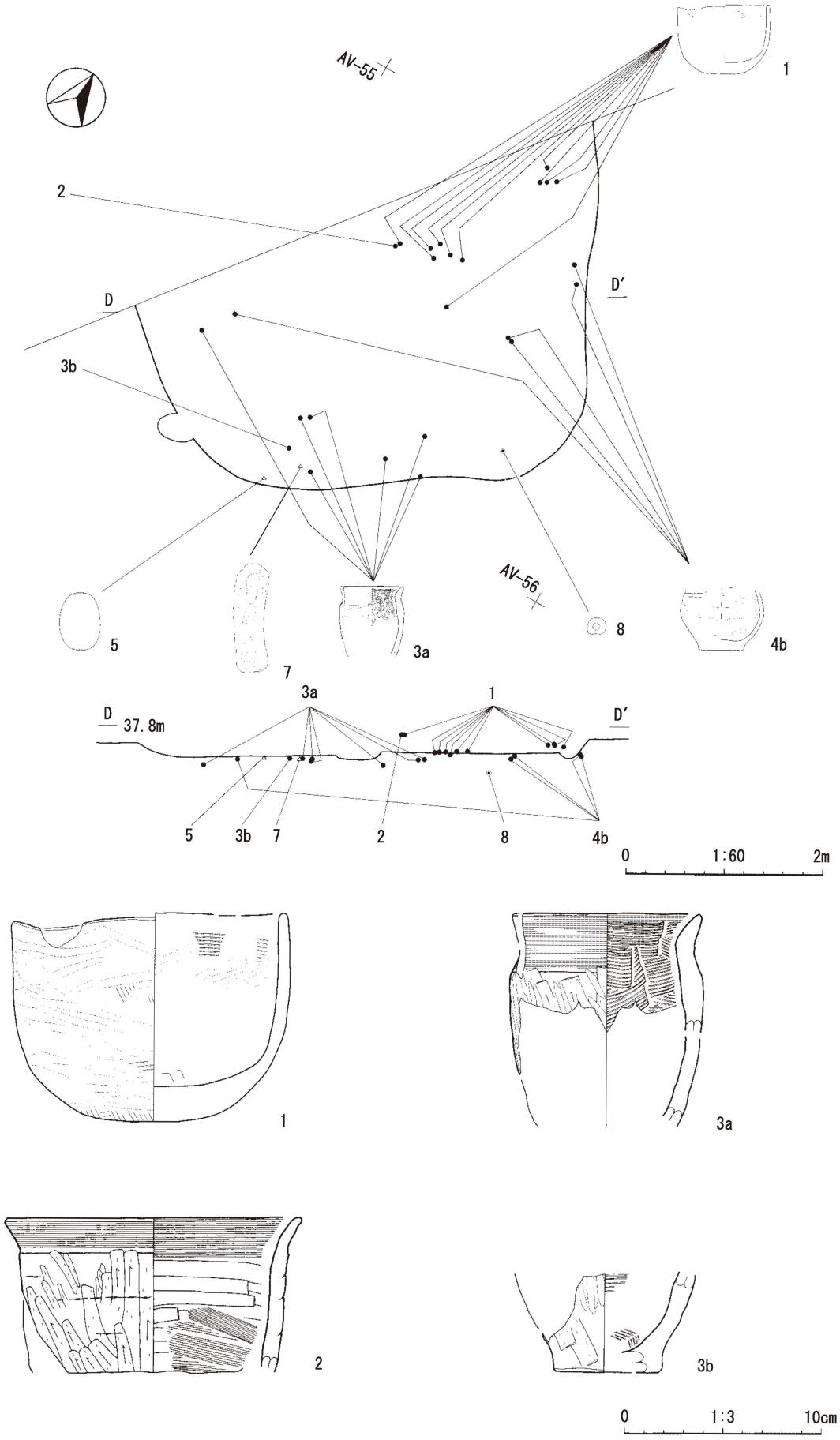



図23　第34号住居跡②

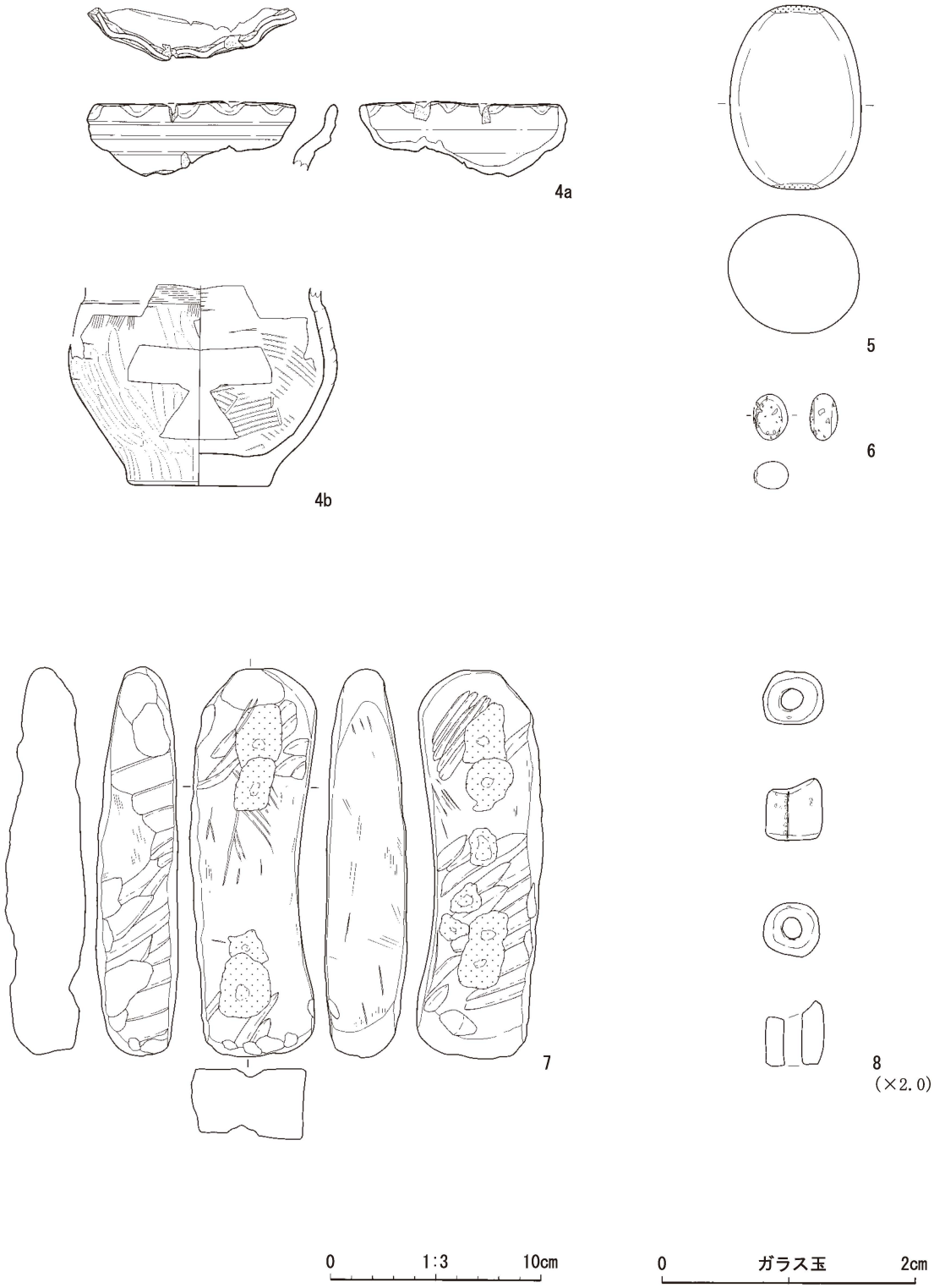
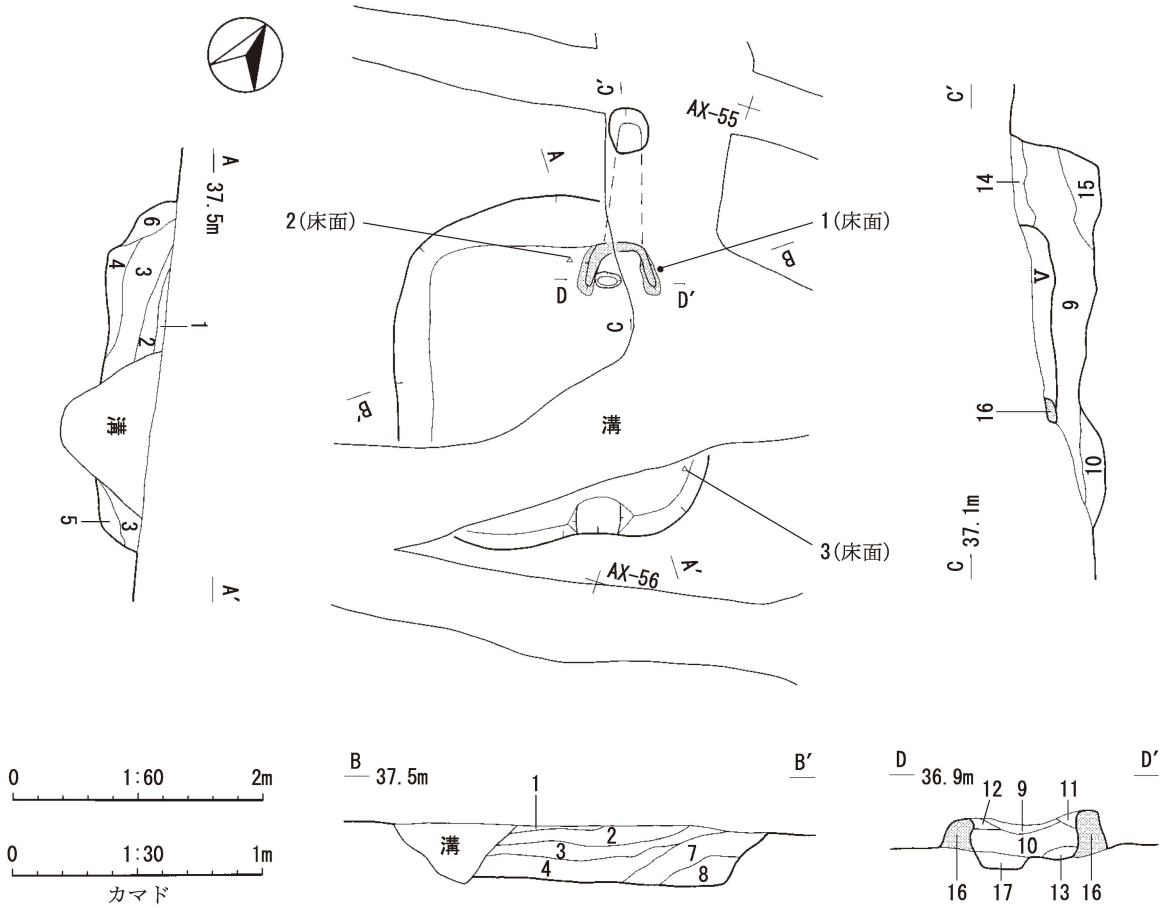



図24　第34号住居跡③




**第35号住居跡**

| | | | |
|---|---|---|---|
| １層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 黄褐色土(φ1mm)7%、To-a1%混入 |
| ２層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 焼土(φ1～5mm)7%、To-a5%、黄褐色土(φ1mm)2%混入 |
| ３層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 黄褐色土(φ1～10mm)10%、軽石1%混入 |
| ４層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 黄褐色土(φ1mm)1%混入 |
| ５層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 黄褐色土(φ1mm)10%混入 |
| ６層 | 10YR2/3 | 黒褐色土 | 10YR3/4暗褐色土右側下部に混入、黄褐色土(φ1～10mm)5%混入 |
| ７層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 10YR3/4暗褐色土15%混入、黄褐色土10%混入 |
| ８層 | 10YR1.7/1 | 黒色土 | 黄褐色土1%混入 |
| ９層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR2/3黒褐色土10%混入 |
| 10層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 7.5YR5/8明褐色焼土粒3%、炭化物2%混入、黄褐色土(φ1～2mm)1% |
| 11層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 10YR5/4にぶい黄褐色土10%、7.5YR5/8明褐色焼土粒3%混入 |
| 12層 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 10YR5/4にぶい黄褐色土50%混入、10YR2/1黒色土10%混入 |
| 13層 | 10YR2/2 | 黒褐色土 | 10YR3/3暗褐色土20%、炭化物1%混入 |
| 14層 | 10YR2/1 | 黒色土 | 黄褐色土(φ1mm)2%混入 |
| 15層 | 10YR3/4 | 暗褐色土 | 10YR2/3黒褐色土20%混入 |
| 16層 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色粘土 | (袖部) |
| 17層 | 10YR4/4 | 褐色土 | 炭化物粒(φ5～10mm)1%、焼土粒(φ5～10mm)1%混入 |

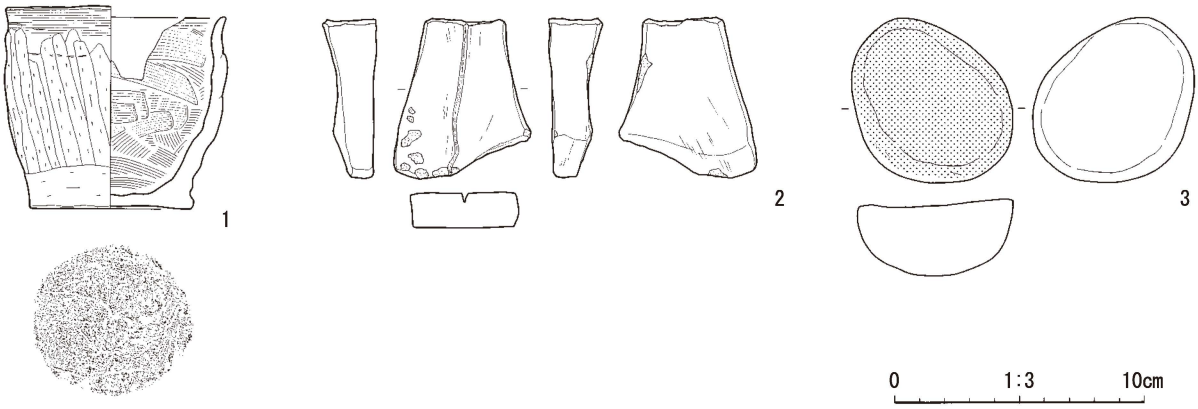



図25　第35号住居跡